

二十四輩順拜圖會

信濃上野

五



二十四輩順拜圖會卷之五

目錄

◎信濃之部

戸隠山

願法寺

親鸞松

長命寺

康樂寺

正妙寺

本帶乃指通

上野之部

明高山

善光寺

堂照坊

西藪寺

芝阿彌陀堂

忍智乃名号

長稱寺

藤巻の庵

明專寺

本田若光の連妻

那中 横捨山田毎の月

本誓言寺

武運長久の名号

正妙寺 東山

八幡乃社



明智坊旧跡
新田足利
新田足利

以上

妙高山

妙安寺

二十四輩順孫圖會卷之五

信濃國

飯後より信濃へありて河川と野尻との名に國界の川あり
右の方より飯後飯後山より飯後山へてあり

○戸尻山の飯後山より飯後山へてありて河川と野尻との名に國界の川あり
右の方より飯後飯後山より飯後山へてあり

○戸尻山の飯後山より飯後山へてありて河川と野尻との名に國界の川あり
右の方より飯後飯後山より飯後山へてあり

○戸尻山の飯後山より飯後山へてありて河川と野尻との名に國界の川あり
右の方より飯後飯後山より飯後山へてあり

戸隠山

戸隠山は海に近く
南面より登る
大門二玉門と云れり
寿石怪岩なるあり
りて松林の茂る
松林の茂るあり日
の影は山に映る
儼然とあり皆松とて
蒼々として山の色
は盛夏の竹と云
れ雪の積るまは
山の色は後花あり
阿弥陀の山と云
れ中とて松の木
高祖聖人登る
山あり中の院
あり松林の茂る
あり松林の茂るあり
松林の茂るあり
松林の茂るあり

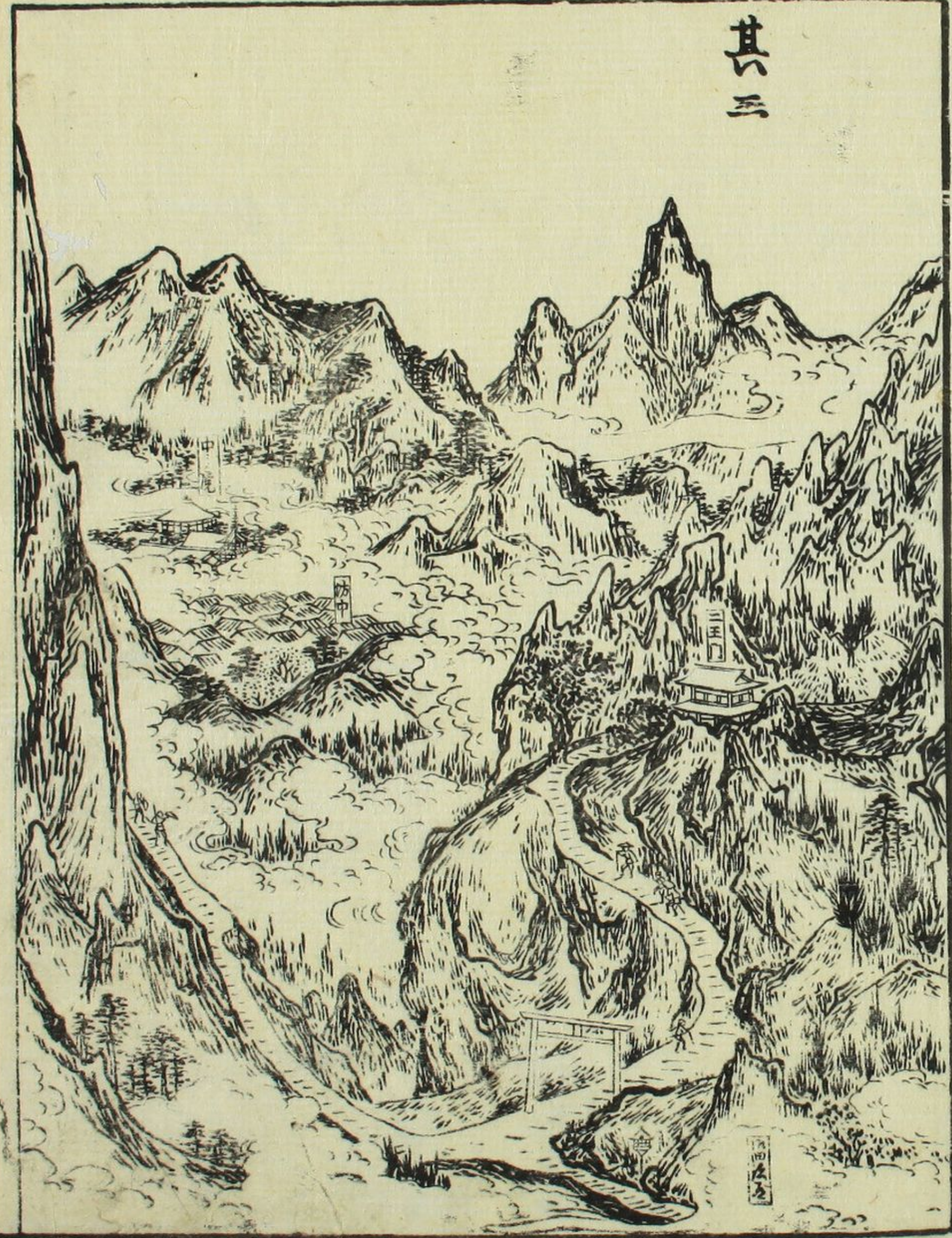


又聖人戸隠山あり
妙なる月影の
のぼりたると
海あり
山あり



戸隠山あり
山あり
山あり

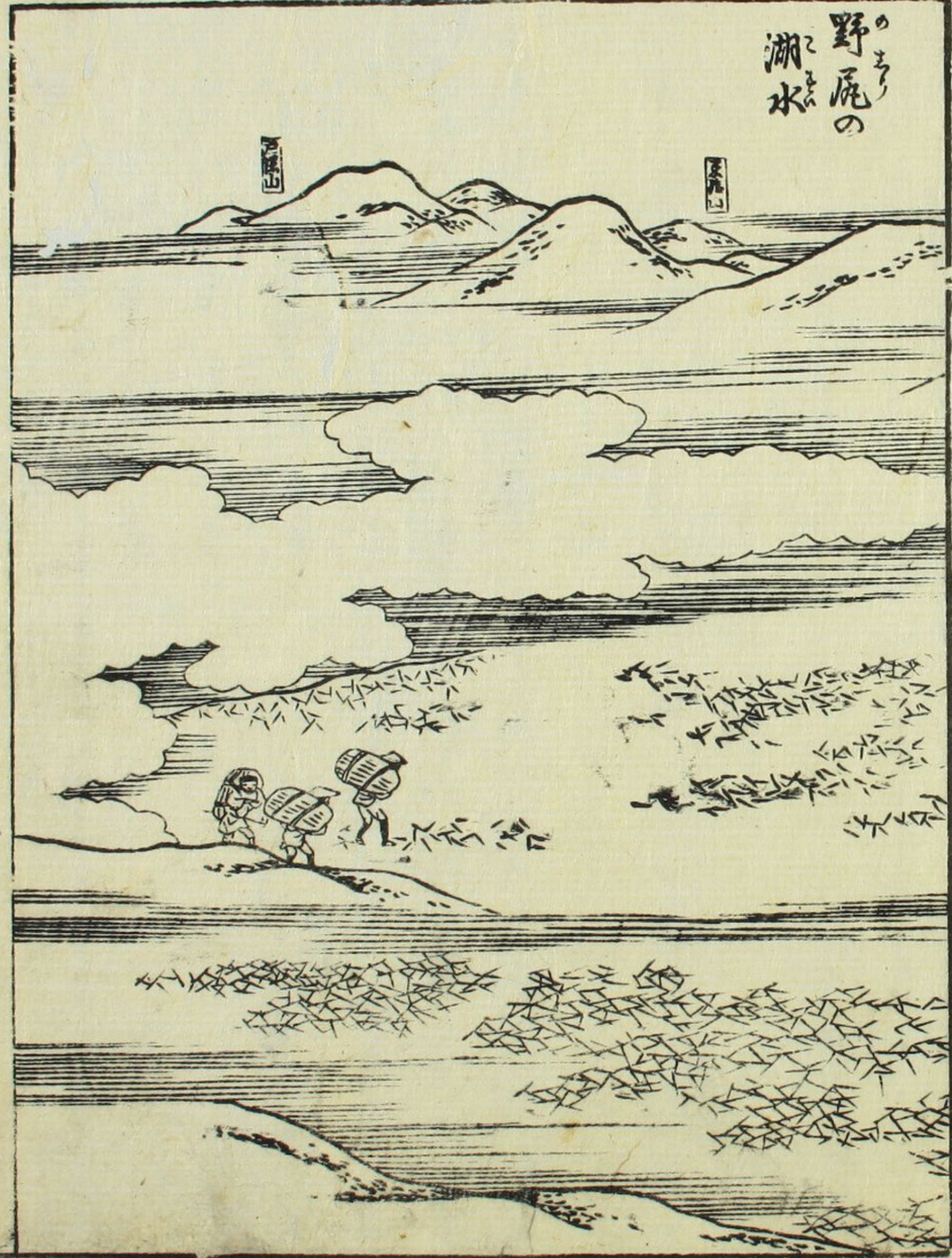
其三



五ノ三



野尻の
湖水



明光山



○妙高山の麓より西の方城後の園界にありて山園のうらやましく、積雪の
 上を極くうらやましく、きのひきの峰々ありて山の上を走りて、
 乃、積雪のうらやましく、積雪の上を走りて、

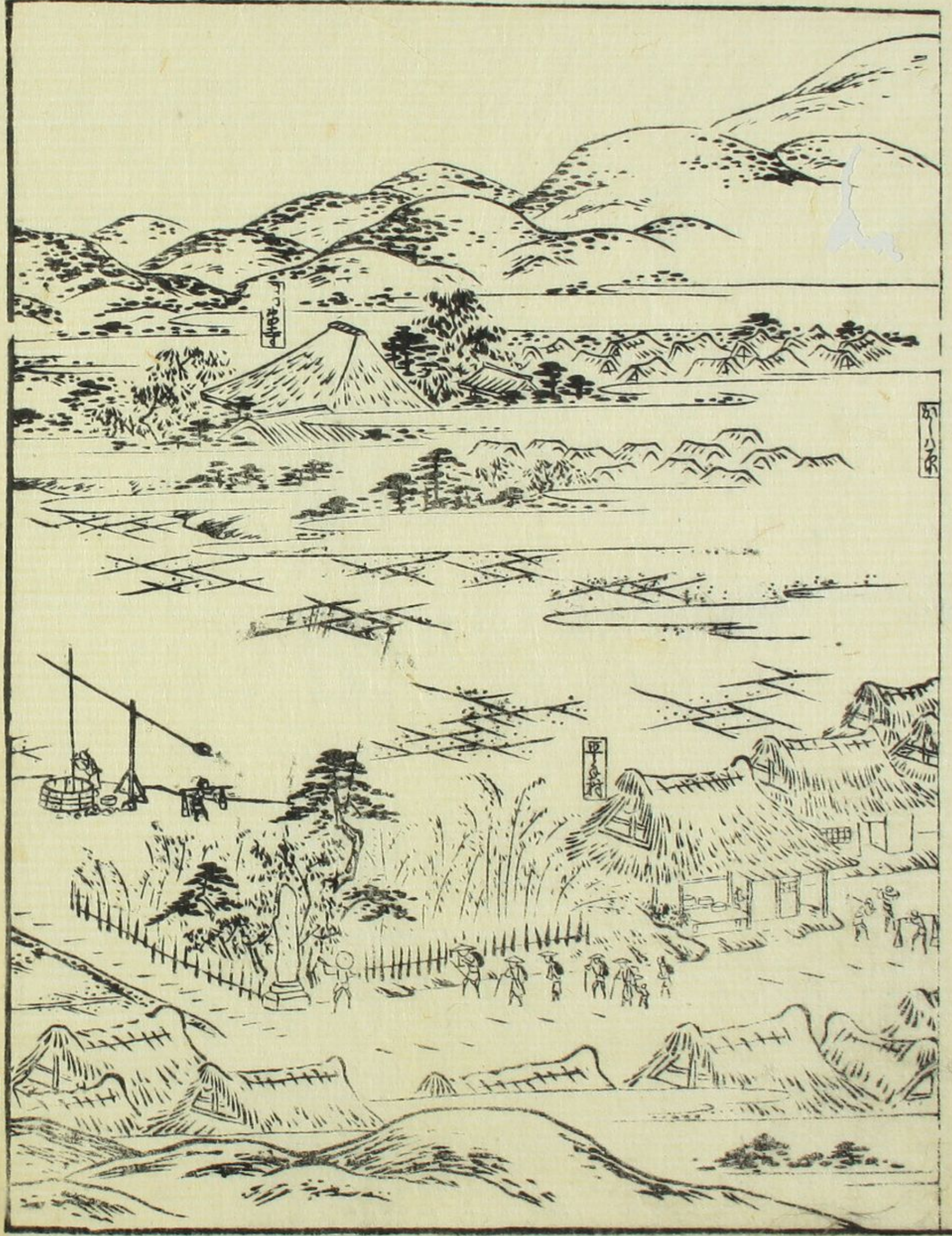
河原山明専寺 東流 水内郡柏原とあり

本寺阿彌陀如來 市長三三三守 原信加高野懸 本堂九間に面○此寺往昔三州安
 郡月系とありて、大なる寺なりしが高祖聖人圓宗より所傳
 治の時三河國大淵の岩折寺に於いて所教化し、せ終つて初聖
 人の帰後、圓法隆法にて本宗を改め真宗の佛圖と
 たり其後御弟子真佛上人も復た来りて化隆に終つて
 あり高祖聖人九名の名号三幅と深谷ありて、三幅と
 け明専寺に授けし一幅の地、又即ちまゝ終り一幅の地、
 復橋安樂寺に授け終つたりや○當寺の其後真宗念
 佛の道場として代々お續し、より今も天正年中に織田

明高山



月原山
羽専寺



信長云石山の所本坊を妻て合戦及び比叡如上人又坂所
 籠城はし附三州又真宗の門徒教多むるに因司か信
 長云(對)憚り終るの旨何れ宗門所傳廢のりあり
 去れども志乃深切り者因司の命と遠消して改宗
 せられたるに西禪門と首と別らぬ其附明香
 寺とかの又即妻の國中退去仰後區原處國又三獄へ
 始り普光寺村又因恒一のり又當不又後恒一寺法相
 續ととつり○靈室九字名号十字名号聖人之
附真寺六字名号
運如上人所著 其外教品これと略し
 枕石山願法寺 水内郡新井村より
 本寺の阿彌陀如來 普光寺分所の聖
重徳を以て河感持 ○祖師聖人枕石所本寺
の所自他よりて有持の
如信上人の所他より 其外靈室略之

○柏原より二里余新井村より二里又後去湯と云
 在家あり是三州の住人又即去妻か東條少一て專明寺と曰
 附又信州又三城邊不仁住人聖人仰真宗九字名号と傳
 来して安委せり

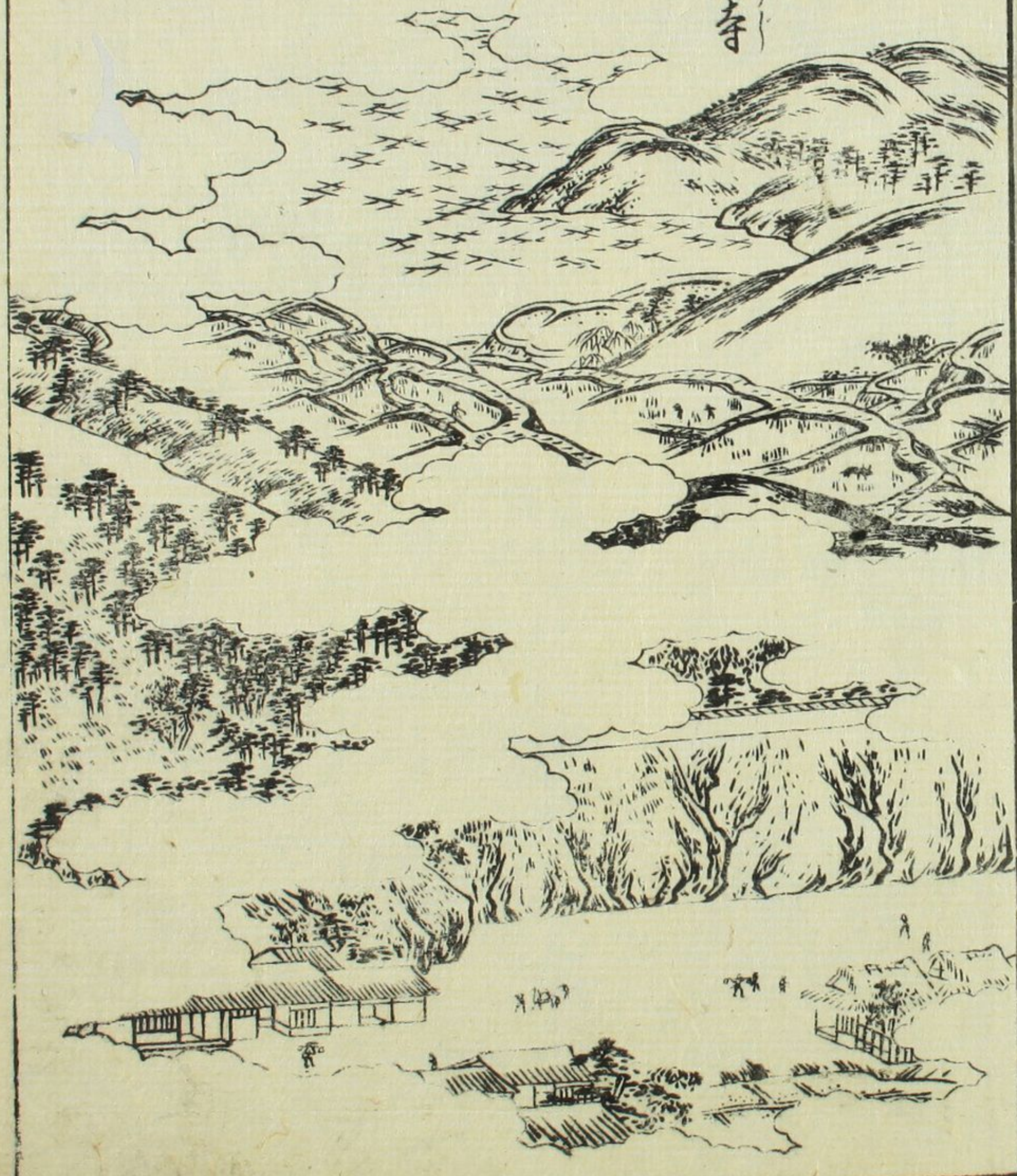
○此邊より右田と云る不仁覺如上人乃所弟子若教坊乃四修る
 若教寺と云る寺有り

普光寺

天長宗

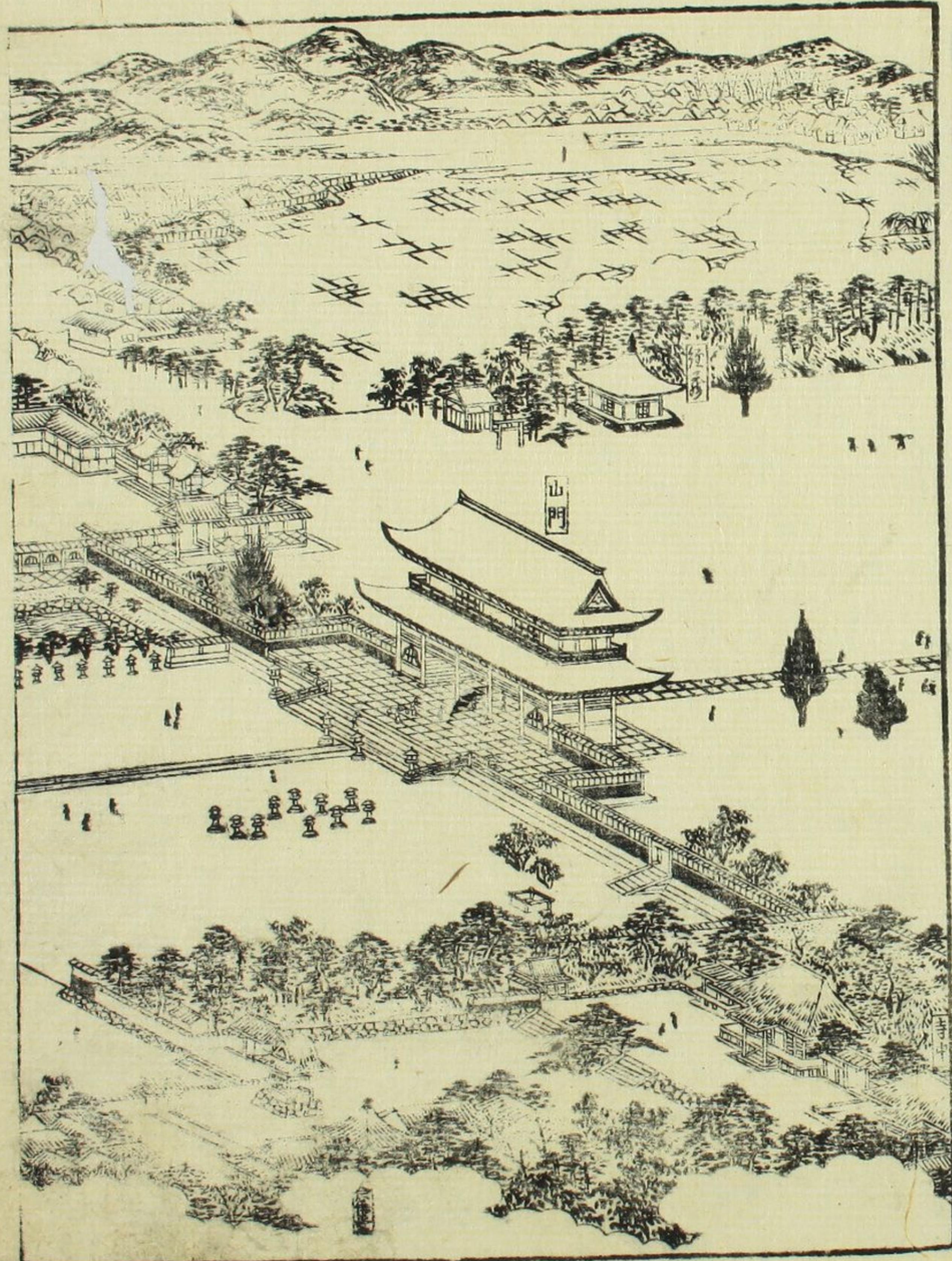
坊舎に十六區○本堂 三十一六の二重
二十九間三又持教百三十六 此方に門の号あり
 定額山若光寺西に捨山降去寺南に南命山無量壽寺
 北に小室山雲上寺とあり正南に破風他あり他の堂舎も
 多し内陣は正中と限り左の間に普光若依孫生若乃
 像を安置し右の間に所戸帳の内所本寺の所正律法座あり終り又

石光寺の中街

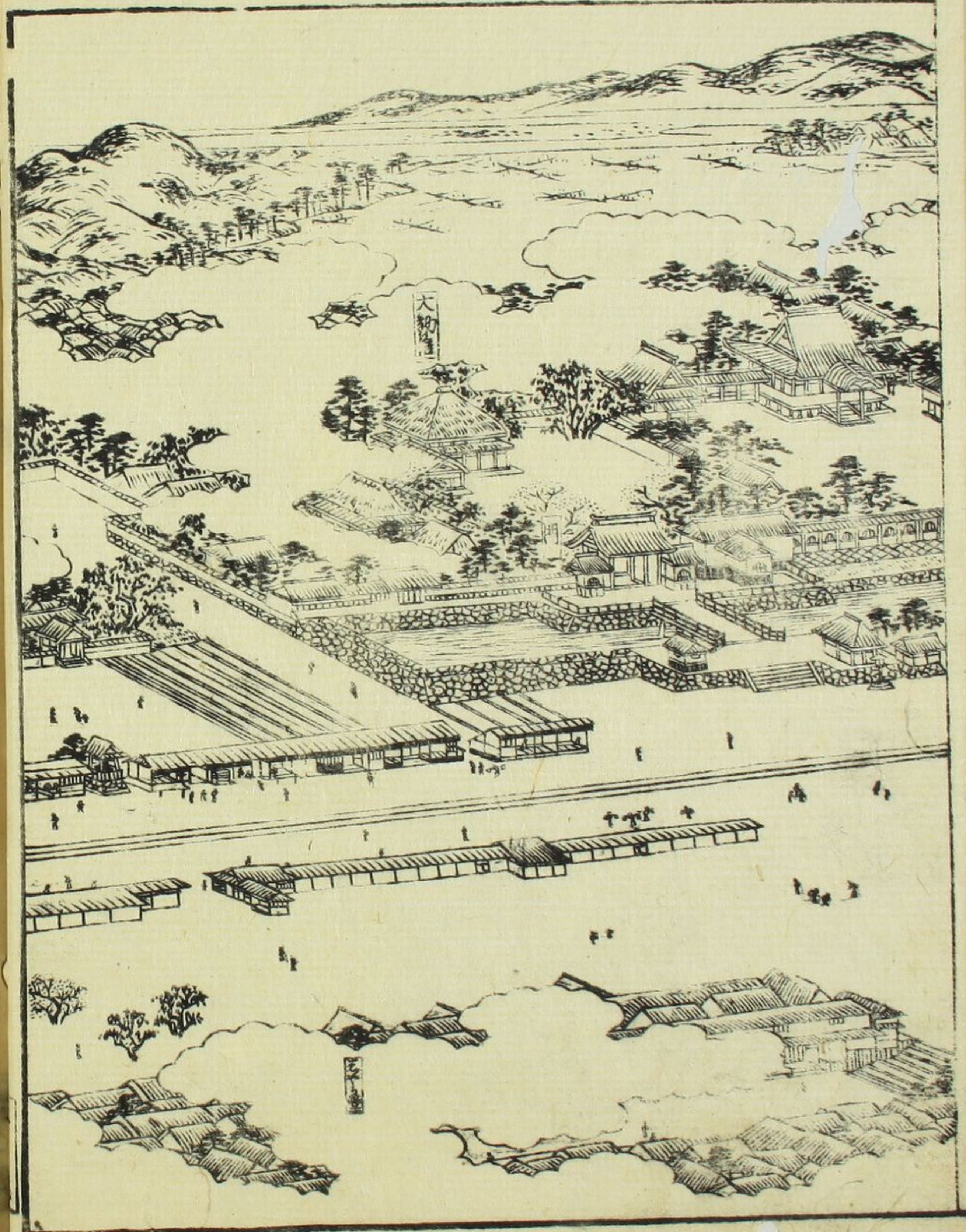
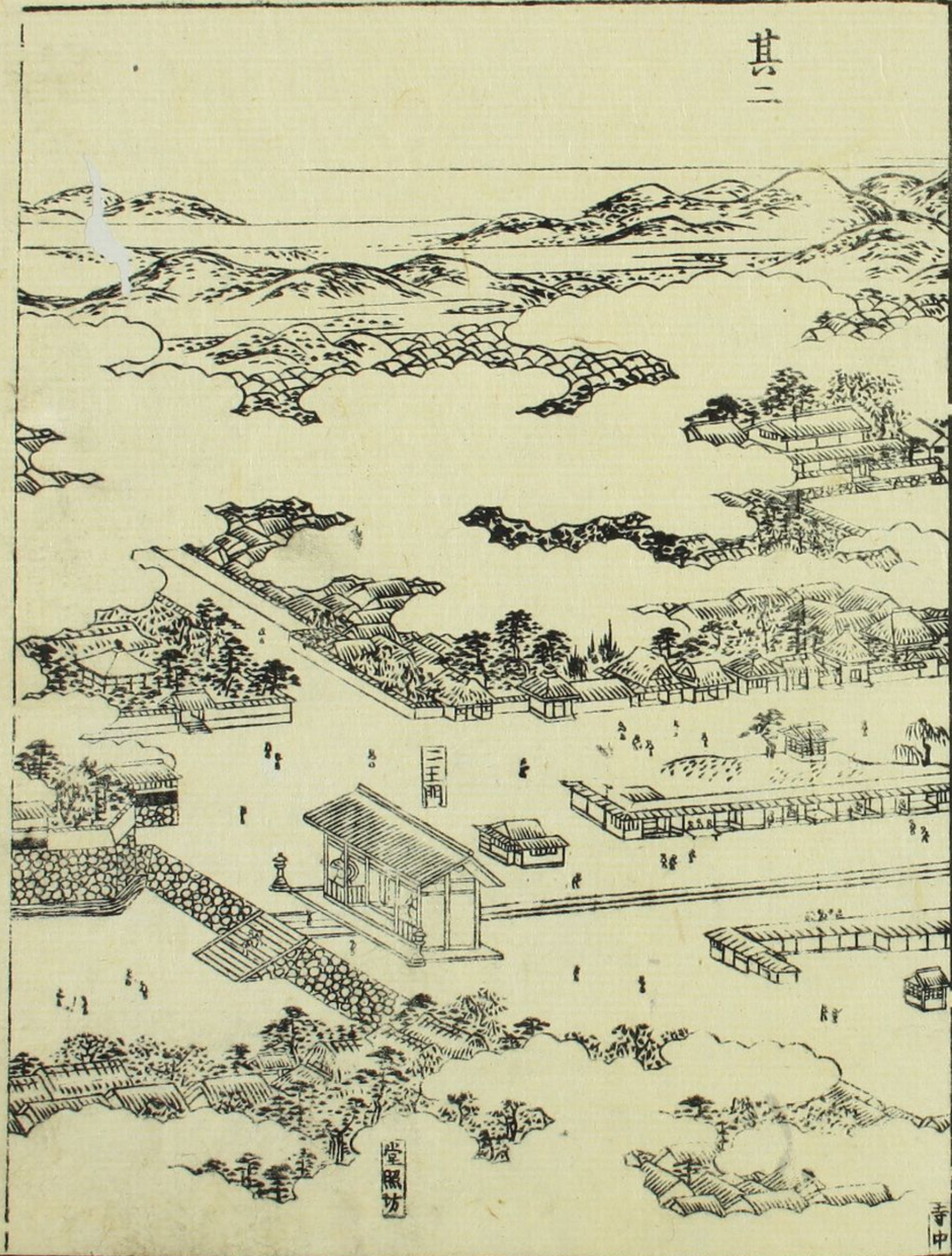


依の堂塔を奉ると安んずる格と爲し、此は往昔石光の屋造り準
 トたる堂にぞんとうや又如来石光の佛勅して予と汝と同座せ
 んと海に移るのありたる内陣を左右安んずる也とぞ。○山此は天竺の山
二天竺の山二王門此は天竺の山六間三又二か
 奉る一光三の圖源檀令正阿弥陀如来に如來の日奉へ後らせ給ふ
 人皇三十代欽明天皇十三年 申十月十三日奉堂建立の人皇三十
 六代皇極帝の勅也用基の奉る石光朝見

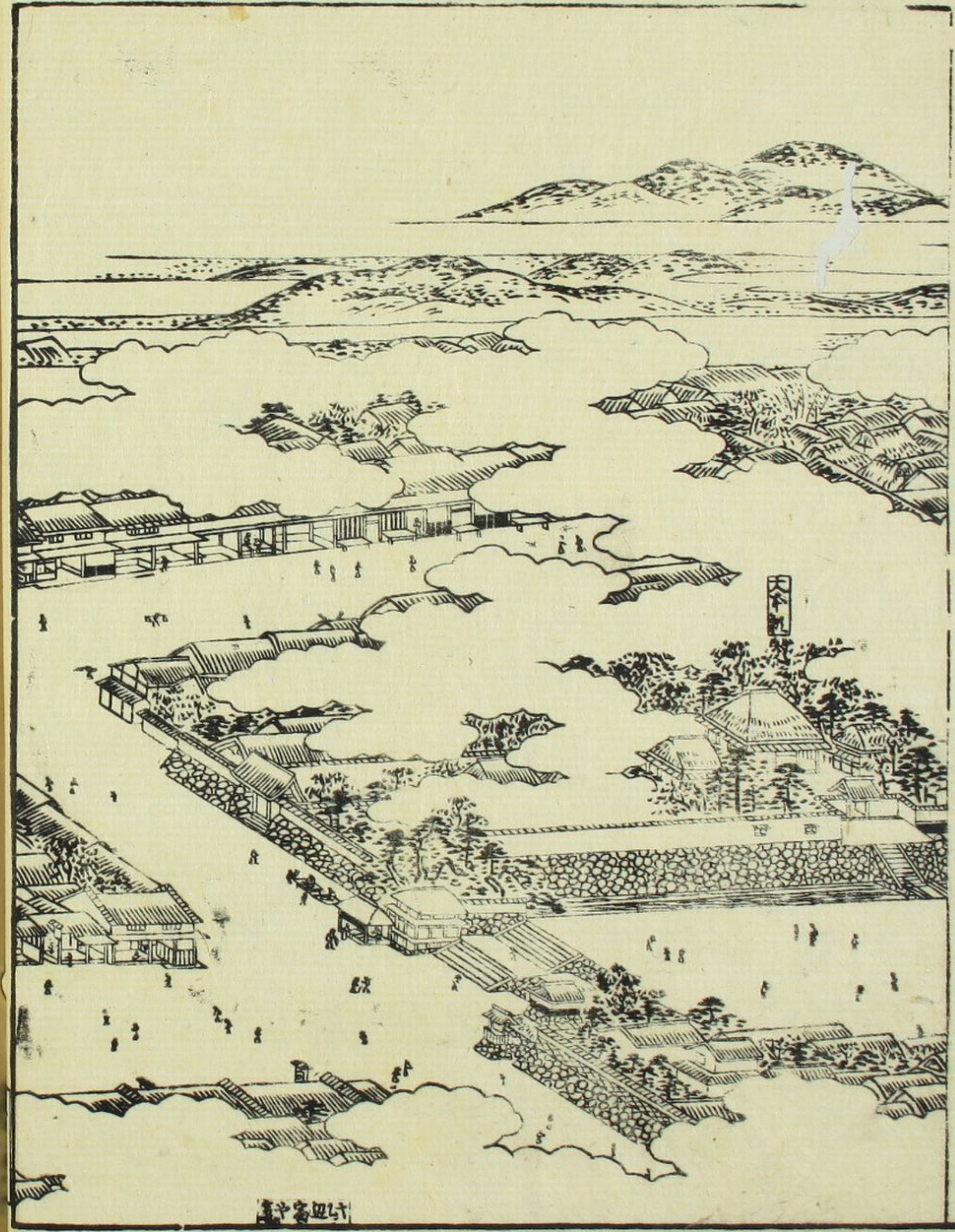
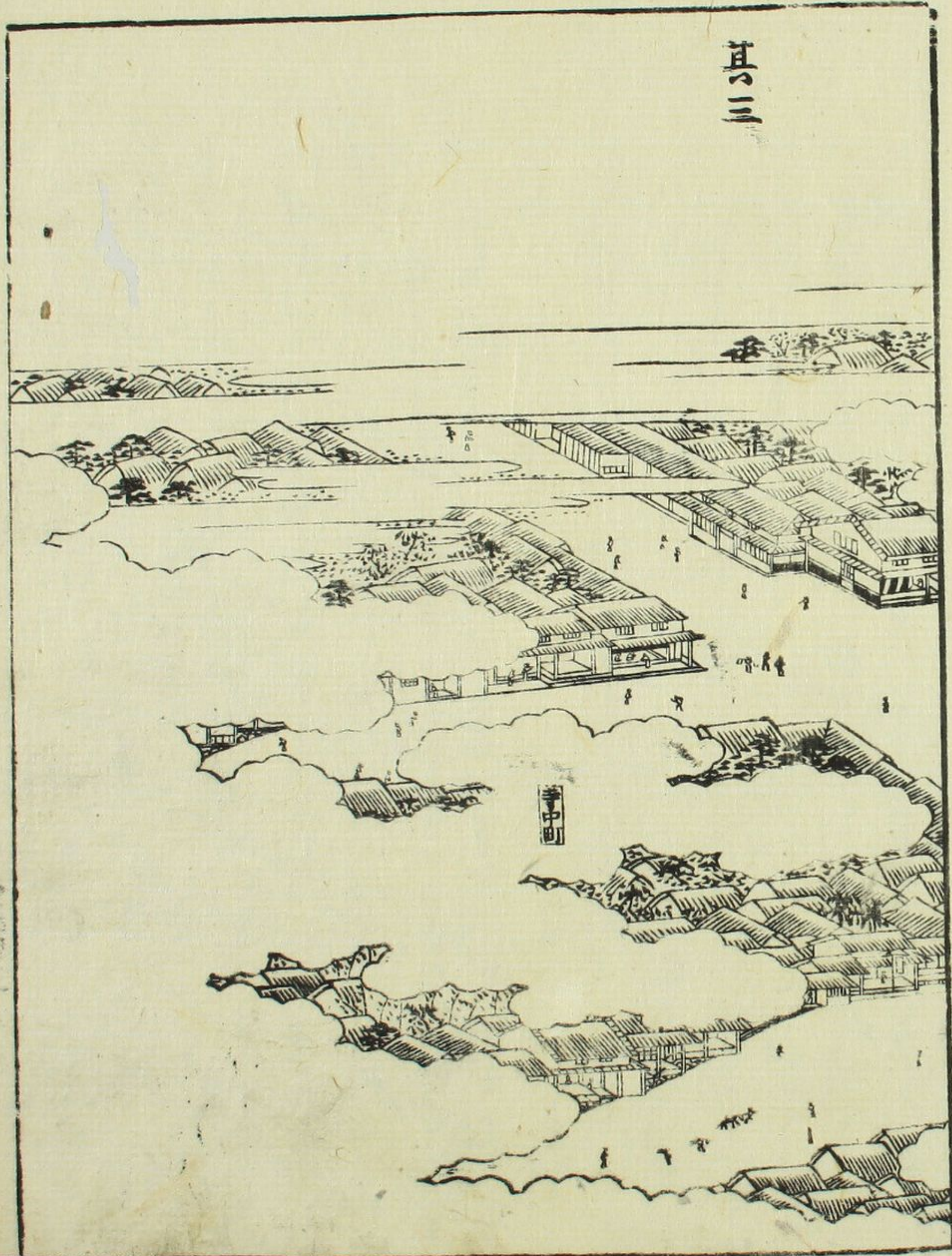
○釈尊東天竺毘舍利城に在りて法論を辨じ給ふ初月蓋長者佛勅
 ようつて西方阿弥陀佛と稱念せしむる長者の西の樓門に正身阿
 弥陀如来觀向し給ふ其時釈尊同蓮座を著し令して觀念城より
 圖源檀令と名乗らせ給ふ高基のせしむる阿弥陀佛の觀しめり
 又如来金色の光を放りて彼令と照し給ふ其令其佛一光三
 尊の佛體を現し觀向の三尊と左右に立坐し何とぞこれを見んか
 雖く拜進給ふ謝あり一佛梵音を發し一佛言て曰く汝にけ



其二



其三



中門

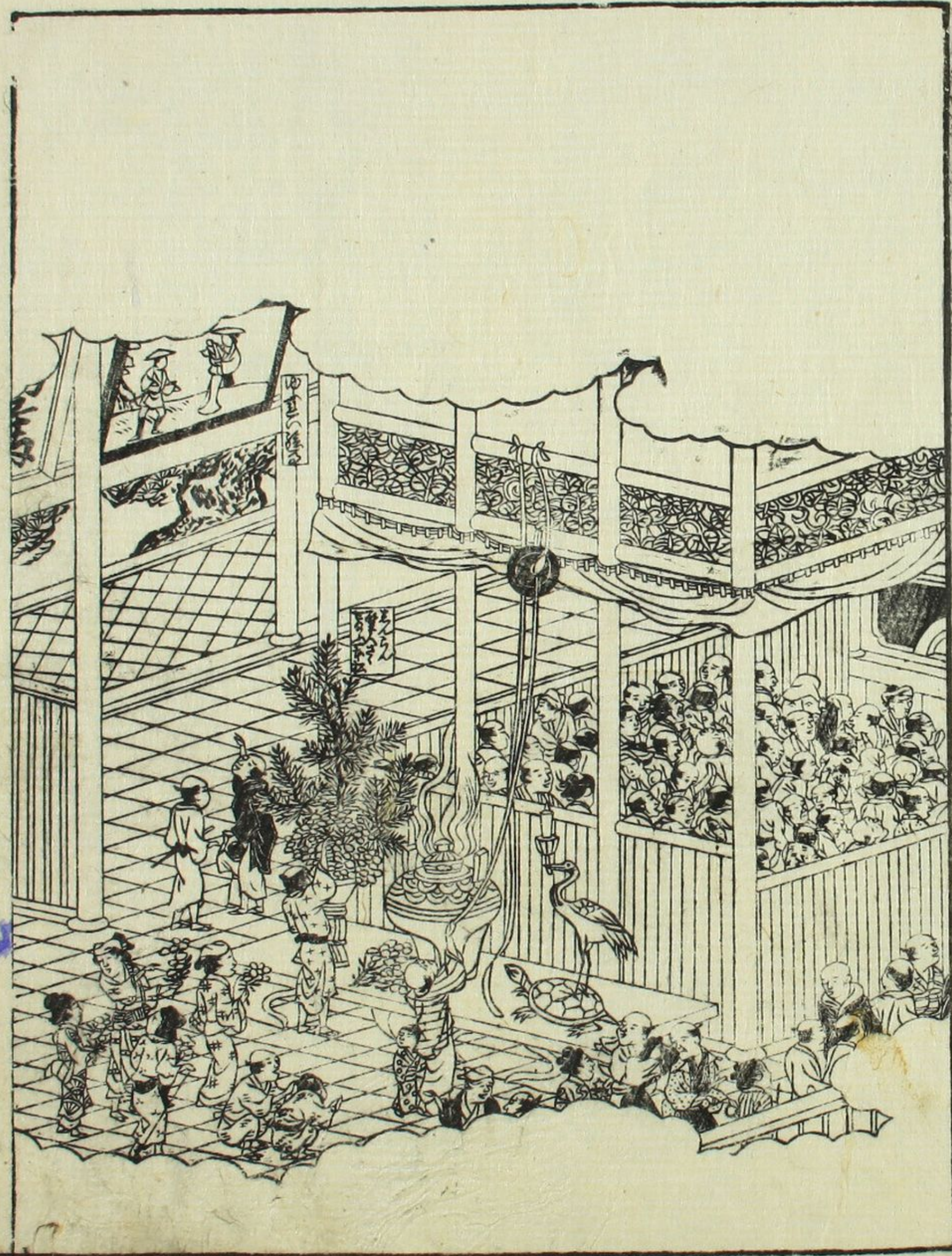
安海界より来世の衆と後とよしと記別して光明とせし
西の界へ飛去給ひぬ今一佛の月蓋長者の家に向り給ひり
吾等の利益と給ひ給ひり月蓋代へ生きたまはし給ひ給ひ
有り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
如来も同じく百海國より来りて大極殿に入給ひて光明王
教へ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
聖明王の後此日本文化して信濃國又生きたまはし給ひ
又幸田若光と号く給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
より人皇三十代秋明天皇の御宇又遠く日本又後らせたま
天皇御くも敵みく曾我大居士命して志浦の里向原寺に
御給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
志浦難波の淵又流れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
大和國志浦の宮敷園の信州幸田若光在番に三幸の任憑て
國へ降み給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
出若光の肩背より移り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ

海より聖明王より我は先阿弥陀の三身より汝も強縁の
より日本又来り年久しく汝も信居より遠く汝も本國より
来世の衆生は海を渡せんと明り又悟り若給ひ給ひ給ひ給ひ
むせひ又是又本國信濃より身歸り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
重恭敬の誠心と盡し給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
て悪縁は盡せんと給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
抄ひて天皇廣大深重の恩徳と思召と勅命みく大伽藍を
建立し正身の佛侍と安んず鎮座在り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
本寺は如來佛也
其外數の諸堂園の

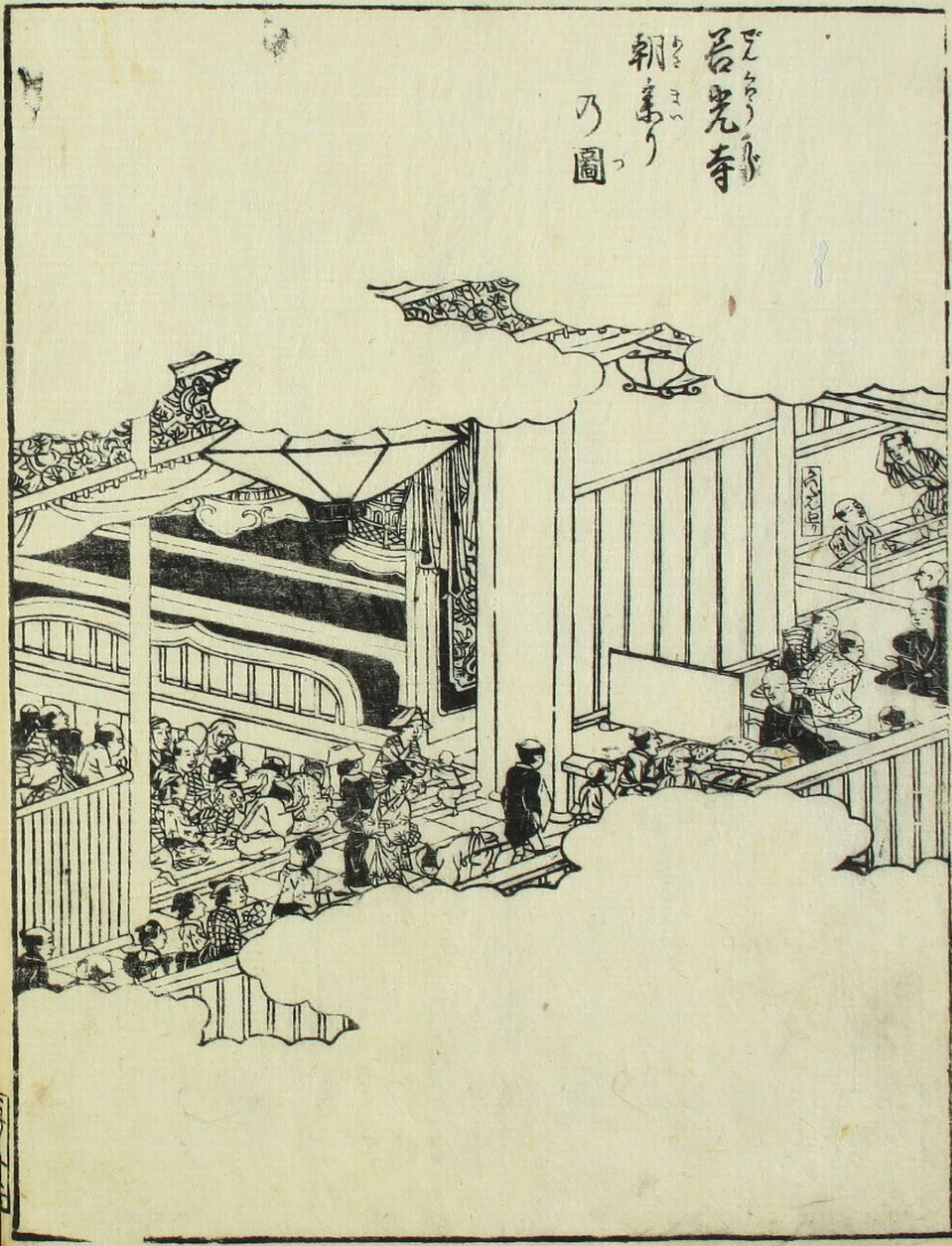
○高祖親鸞聖人此靈場より度く参詣したまひ給ひ給ひ給ひ
二年聖人五十三歳に月十九日此御正侍一光三身の真佛と一侍
分身にて感徳し給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
来世也縁起の高田山専修寺の所に記し給ひ給ひ給ひ給ひ

親鸞松

幸堂右の内陣に坐す
花松よ松一本建らし給ひ



日光寺
朝集
乃圖



本田義光
 難波の池
 如來と福氏



傳曰聖人當寺(河系)流(り)せ給ひ塔中の僧坊(僧坊)親證院
 止宿(しゆく)互(たが)ひ乃(の)間(ま)日(ひ)毎(まい)山(やま)入(い)らせ給ひ若(わか)本(もと)の松(まつ)一本(いっぴん)と裁(さ)り
 て佛(ほとけ)を供(く)じ給(たま)ふそれより以(も)來(らい)親(おや)百(ひゃく)年(ねん)の今(いま)もまゝ
 一日(いちにち)も怠(おそ)りなく日(ひ)々(ごと)松(まつ)を供(く)する若(わか)光(みつ)寺(てら)の法(は)例(れい)とは如(ごと)く
 柳(やなぎ)此(こゝ)三(さん)尊(そん)佛(ほとけ)の方(かた)便(べん)法(は)身(しん)の河(か)邊(へ)より懸(か)り給(たま)ふ光(みつ)明(めい)中(ちゆう)又(また)出(い)出(で)し
 給(たま)ふ像(ざう)を以(も)て是(こゝ)正(ただ)真(ま)の阿(あ)彌(あ)陀(だ)如(ごと)く親(おや)鸞(らん)聖(せい)人(にん)是(こゝ)還(かへ)り給(たま)ふ
 化(け)の聖(せい)者(しや)を以(も)て内(うち)院(いん)日(ひ)待(まち)たりと云(い)ふも猶(なほ)給(たま)ふ所(ところ)の形(かたち)を以(も)て若(わか)巧(こう)方(かた)
 便(べん)の益(やく)と給(たま)ふ給(たま)ふと云(い)ふ不(ふ)謂(わい)松(まつ)の諸(しよ)本(もと)の司(し)として十八(じゅうはち)と稱(なづ)され
 即(すなは)ち給(たま)ふ十八(じゅうはち)本(もと)親(おや)表(あは)れし給(たま)ふと云(い)ふ伏(ふ)惟(た)は給(たま)ふ所(ところ)日(ひ)待(まち)の中(ちゆう)に
 かのまゝ立(た)給(たま)ふの中(ちゆう)信(しん)と云(い)ふ感(か)ぬ故(ゆゑ)に親(おや)鸞(らん)松(まつ)と稱(なづ)し一(いっ)本(ほん)と云(い)ふ
 うや

堂(どう)照(しょう)坊(ぼう)

若(わか)光(みつ)寺(てら)中(ちゆう)に十八(じゅうはち)坊(ぼう)あり内(うち)十八(じゅうはち)坊(ぼう)親(おや)鸞(らん)聖(せい)人(にん)是(こゝ)還(かへ)り給(たま)ふ
 常(じょう)流(り)給(たま)ふは立(た)給(たま)ふ中(ちゆう)信(しん)と云(い)ふ感(か)ぬ故(ゆゑ)に親(おや)鸞(らん)松(まつ)と稱(なづ)し一(いっ)本(ほん)と云(い)ふ

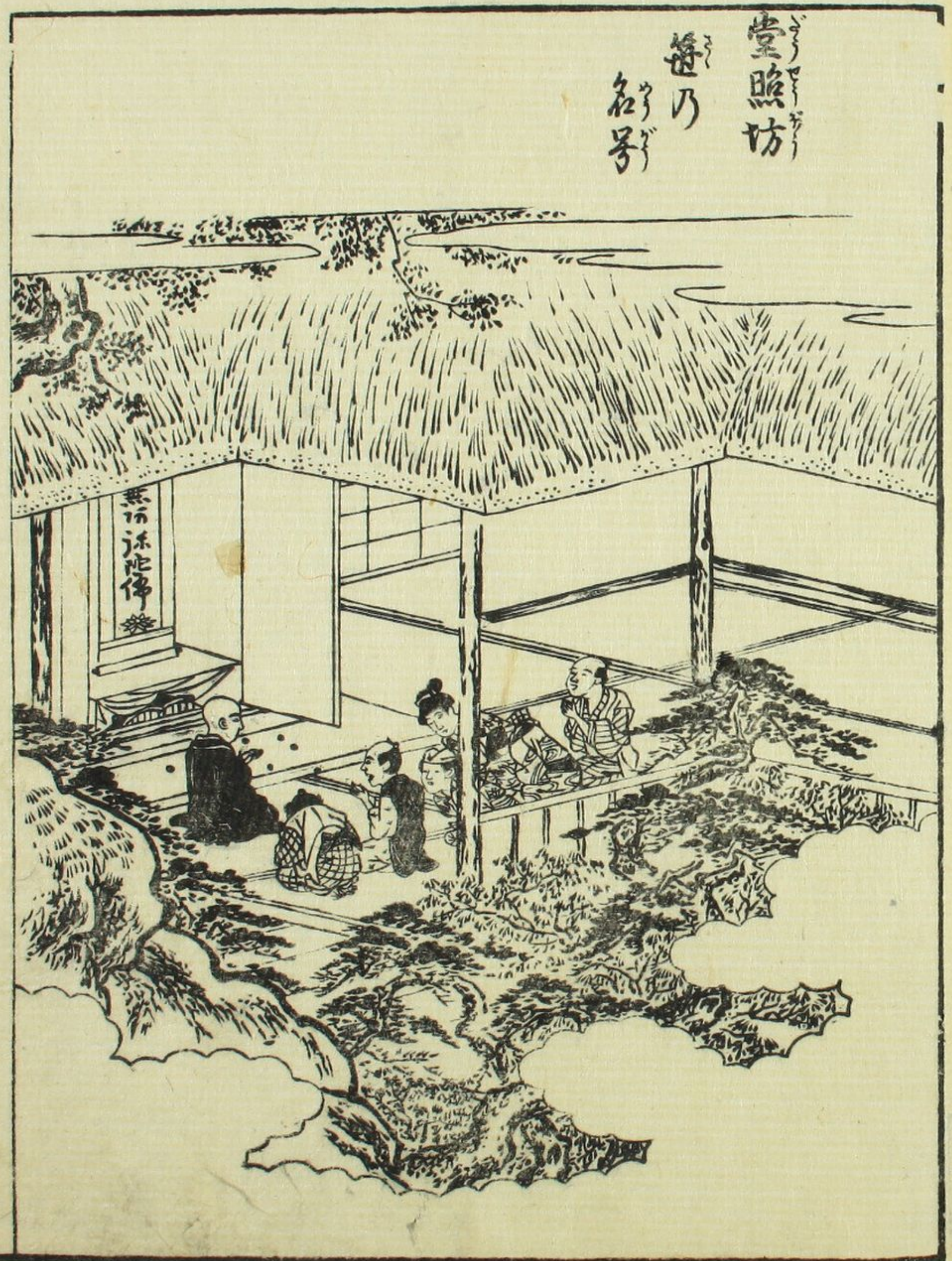
如來と後仕とに之がくちを帯して觀は
なりとも見せしめたる右十八院の内其一坊なり

○若光寺南門堂照坊親德院の住持高祖
親鸞聖人御參詣の宿坊なり御止宿乃同之跡
至終久御遺室三種傳
奉久不謂聖人入十三歳に月十九日若光寺如來一躰かたの金像
感得し終ひたる時け坊止宿し終ふと之又元祖法統上人に定と宿
坊にして一七日系籠し終ひたる舊徳之○什室笹系の名号
○御齒一枚 聖人の御齒之御共名
○紺紙金泥の珍陀
經人御名

○若光寺の東の方より犀川流る川二ツの大川を流る川其源甲州よりゆく深田
嶽の麓とせり流る下流犀川の邊國多身障の處よりゆく長流の邊り
雨川合流一紙後へたれて信濃川と名し新原の邊より海へ入る川也國中の
長流なりけ犀川と流る子浪川のより川中流より其西と丹波流るといふ
より一紙流るの本本曾義仲と紙後乃任人撰る即實平合戦あり一古紙場あり
系の方より上流へる鎌倉の邊より入る西条より都てけ流るの島と合戦島
といふなり

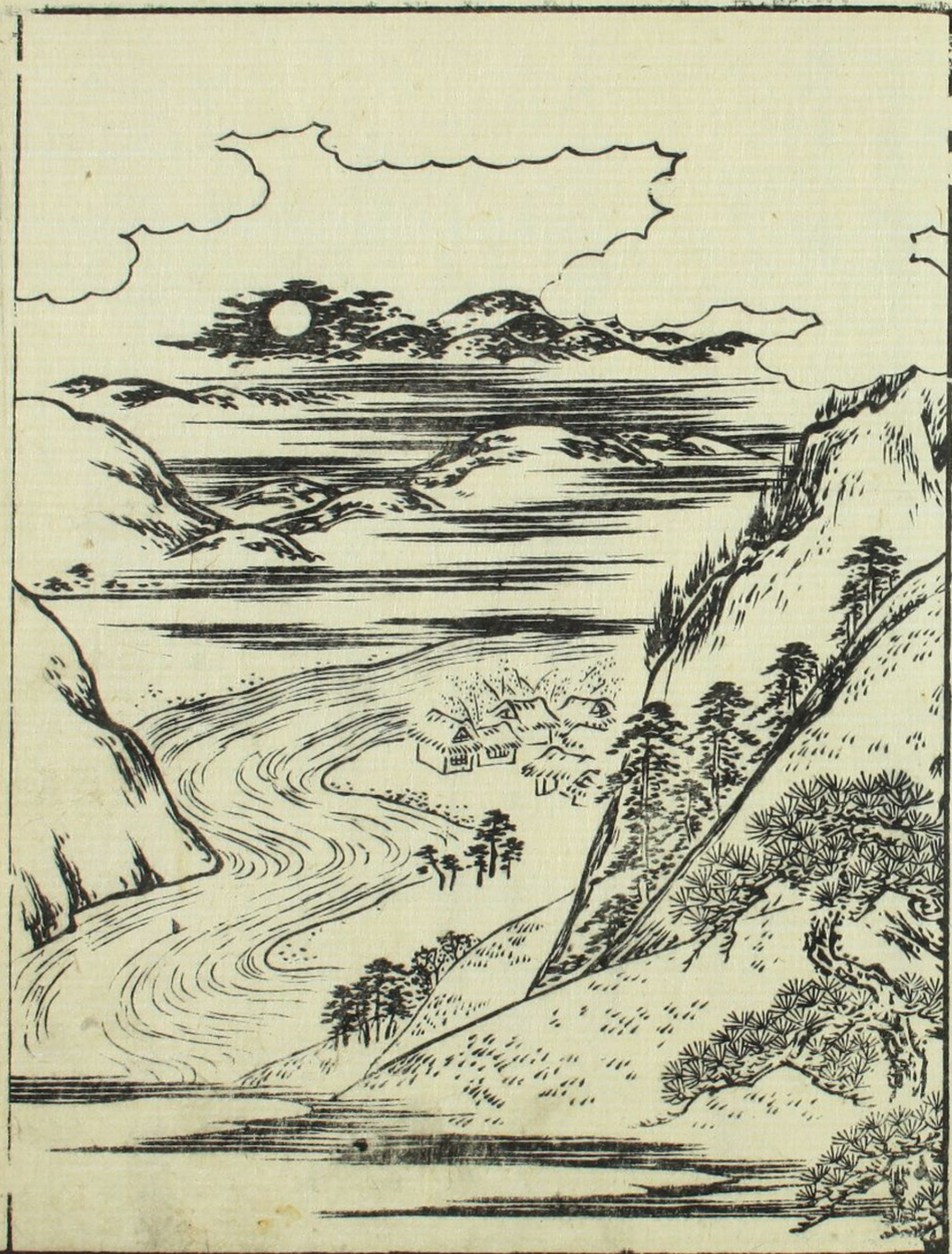
○川中流る水鏡年中甲斐の武田入る信玄紙後の乃鎌倉と對戦し双方智

堂照坊
笹乃
名号









勇の武臣を討死と遂に大合戦のありし其の事々々諸事小要の事
記しし其の事々々

日城捨山の文科郡彦代の名より戸倉へ移向ふ隈川の向ふより後基山を
二一より其のふ文科川の流是あり勅勅撰ふは川を
今更ふりし其の川の流も厚敷とせん其の事々々

候もてふ長樂寺の親も所妻をせり老の方又候石とる大石をいふより
候と捨するまじしとや大和物語の文科の里又恒々の男候とまじりて親の
あつかいづはし又其妻のつゝくまゝとまじりて其の事々々
今更ふりし其の川をいふは昔候とまじりて其の事々々
○田毎の月の文科捨捨ふのふ田よりうづの月うげの田面くより今更ふ
中より候けるの風来とせり

布野長命寺

西流 吾光寺より二里 南流あり

尚寺の高祖聖人の直茅抄回西念坊の苗裔より西流二十四輩

第七番也本堂十二間に西徑堂一區坊舎三坊なる阿弥院

如来 用基西念坊 百歳ありて地 西念所坊の俗姓い人望又十六代清和天皇

の苗裔八幡右即義家の孫淡伎守満實 淡馬守義 親の子と と一人の

信州なる丹郡女との城又信じて兵上次郎満實と号し其子也又

即盛長乃息守三郎源貞親と一人なり六歳の時父治又年父盛長

戰場を抄ひて討死せりそれより母又相具せらるる日團水内郡約濬

又移住し廿六歳よりて母をも失ひ其の貞親後心乃志願は

く城後團又智の如来(系孫)明師又值過せんやと祈る七日

儀ぐる夜爰ともうくうくよもあつて又佛が就して告て曰

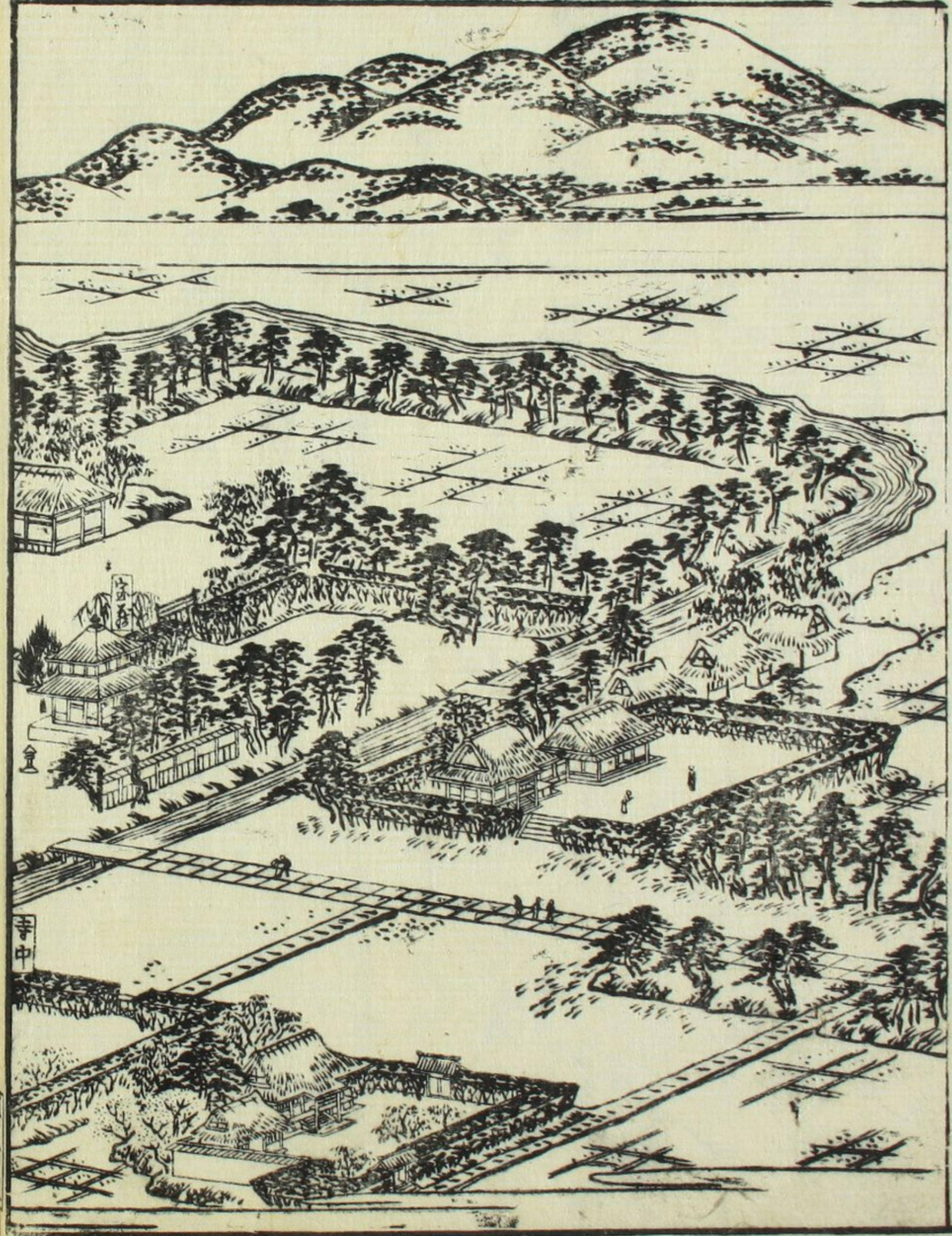
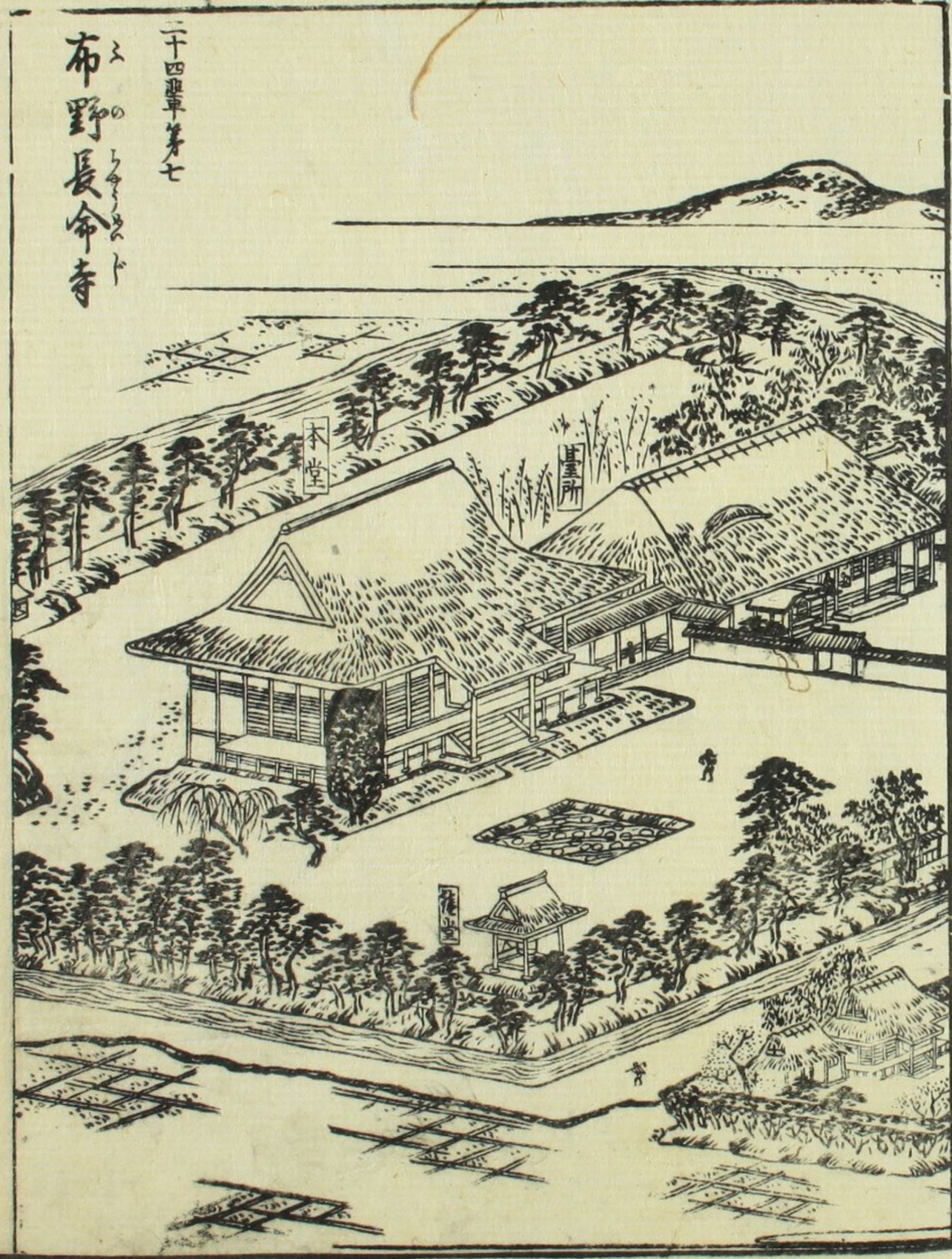
休有る將爰乃安候安界を厭ふて善提のる小入んとて人

識又音持の事なりなり今爰又真の知識其名を善信

坊親等とて彼師又既候して教化と善候しと祈る靈薬

布野長命寺

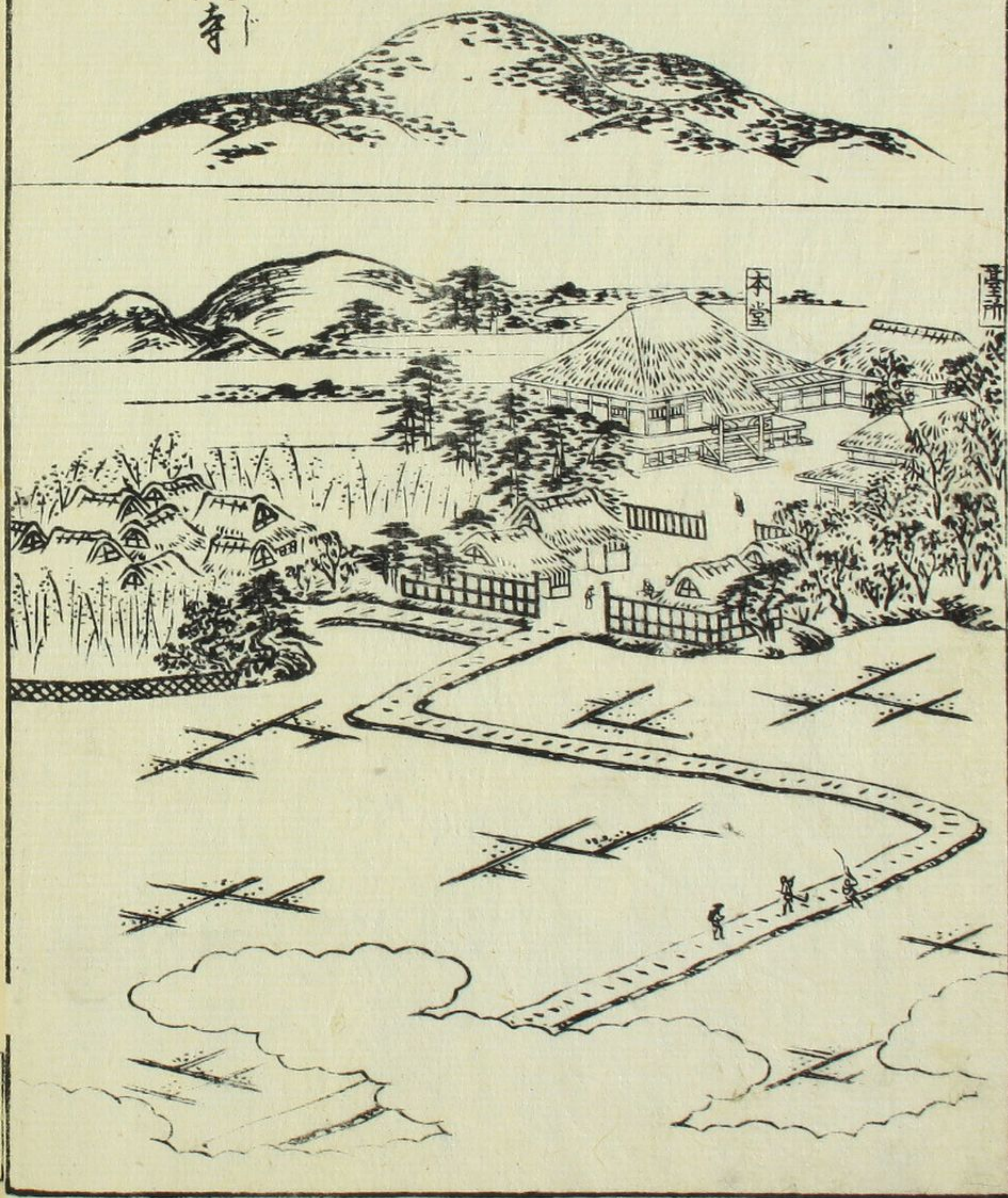
二十四卷第七



を奉蒙急ぎ聖人の美房小より安心の志如來の具若と
信り伏て御教化と教ひ奉れり聖人即彼がふるは力奉親
の不可思議を説く九丈徒生乃安心とて移んごらふし
移ひたれり貞親法苑の法よむせひ三西に信心教得して
御弟子とらんを教ふ聖人これを見し移ひ西念と名
を移りたる宿願の如くぞみ難き是よりして西念日秋る
祖聖人は常法と稱名念佛ありたりしが後武州
足立郡埴田とふる所に一寺の寺と營々専ら弘教一系
の宗風を傳へ祖師聖人御入寂の後とんども孫々教化
壯んぬりたるが正應三年は御本廟第三世是如上人
関東御經廻の時西念いもぞ存念して百七やあは是如上
人な濁くまじりしうは是如上人と云ふ教ひ移ひ西念と對し祖師

所相傳の安心と易移ひしは西念坊にて高祖聖人より
口授お傳りたる名の安心記の御傳りたりしは演説せし
是如上人始と教むを移ひ御坊の年齢百とせとて接し
表老の老毛言忘失の信りありき小其言信りたや小聖人
の口授ししは遠忘り高祖の遺教をば異なりは實際
稱せり小余りたり是令々令齡の長たる徳りしが自今こ
後け寺と長命寺と号しと命し移り干御西念御坊
其好まふ百八歳を命終し三月十五日とせり惱こもなり
瑞座合掌観彼如來本教力の文と漏く念佛教百篇
唱へりこり小息終大往生と遂に年ぬ第二世の信是念佛も
聖人の由芽之是又長命寺より延慶二年は九十八やうて
寂をぬり第三世西祐坊の時建武の乱と寺と撤却せり

西蔵寺
山田成



信州約津の閑基西念坊の故郷なりは安長命寺を再
 肉々系後又代を継ぐが第七世信貞坊の時堂舎を
 月郎布理又後一享保年中又入南堰より移て万代又
 不易なりしむ○靈室十字名号聖人御○九字名号聖人御○
 簾の名号聖人御細○松板六字名号若守之御○六字名号蓮地上人
 西念坊乃像一の六名号

成田山西蔵寺 東流 南堰より三千丁長沼あり
 本寺阿彌如来惠心佛 郊御他本堂丸間蓮師堂より蓮如上人御自畫
 の真像を安と○尚寺閑基釋室其俗姓の成我園西念坊
 成田平山の三男成田下総守といふ者これ方りる祖聖人御
 東漸經廻の砌若縁より小熟して御教化と蒙り御附身と成安と
 一字と建して真宗を弘通し西蔵寺と号し○十字名号六

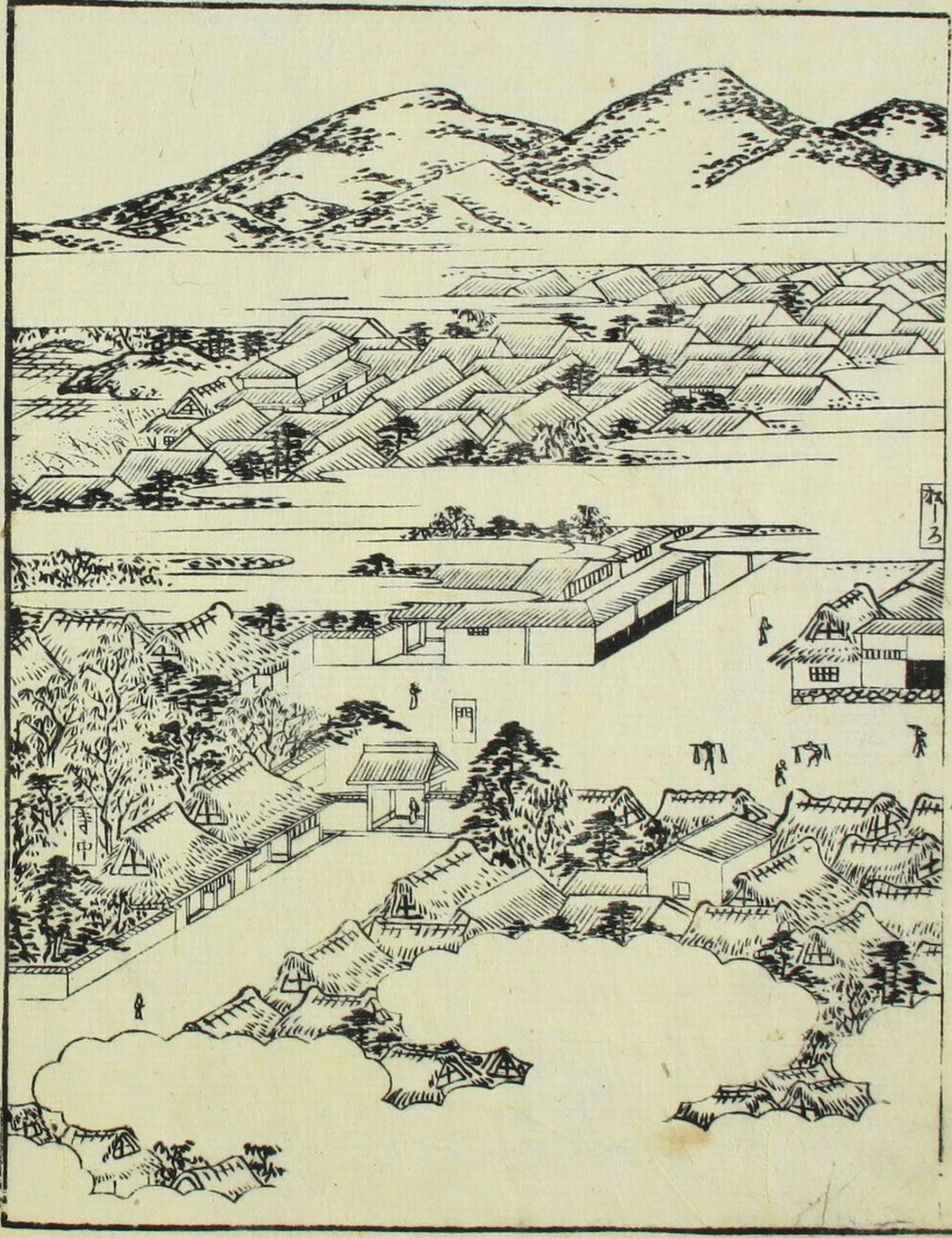
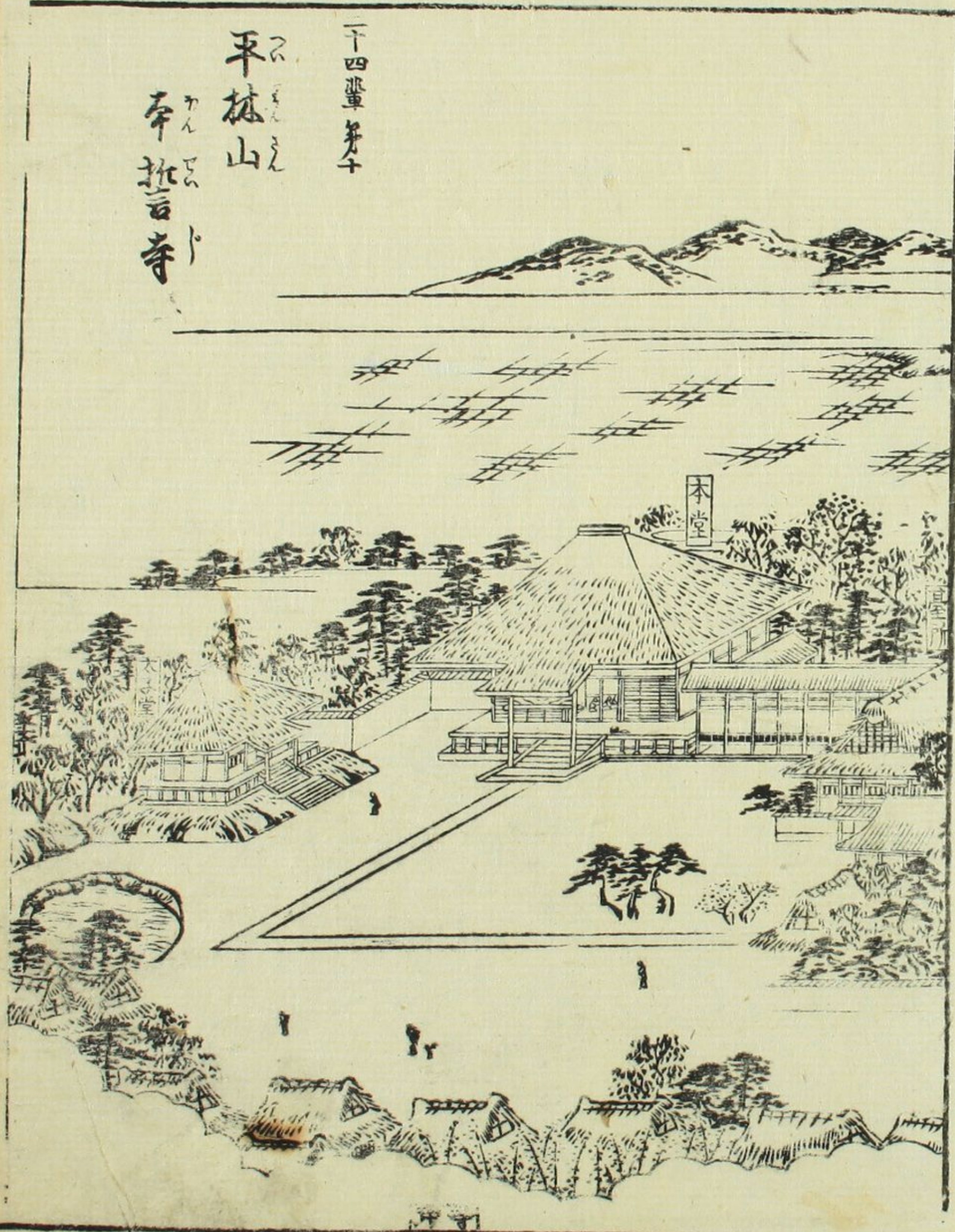
の光明中ニ六種の化身あり聖人の御志あり ○十高僧聖人 ○繪像の阿彌陀如來三幅一幅は
御第一幅ハ高僧傳都御志 ○大般若經切の巻 ○龜井六郎の消息の巻
今一幅ハ高僧上人の御志
阿彌陀の梵字の中の相發して流るる不地結蓮
の蓮開基成田下總守定徳不持と
平林山本誓寺 東山 長沼より五里半松代より

本誓寺の御志 新田院護法堂と号し本堂十間西塔中二坊
本誓の阿彌陀如來是院跡の阿彌陀と稱し 開基是信大徳東流二十四
卷并十番ノ屬ハ是信大徳ハ信姓辰永氏吉田大納言信
明御方り高祖聖人工足ノ真身と号し降命と承つて奥州
流るる石ヶ森と号し一寺と建立しこれを本誓寺と名づけ
社人又弘法と又法像と号し信州又春日ノ教寺專
らかりたりと号し一寺を造立しこれ又本誓寺と号せり
是信大徳の縁起曰開基なりと号し 奥州南部本誓寺の御志あり 尚寺并四世宗信坊と号し新

田丸中ノ義貞の息男と号し徳幼の僧たりき ○濃踏の阿彌
陀如來佛とと号し聖人一尺八寸の像を刻し胎中又二寸八分
の令像を納め最き終ふは其像と號の中又安座し流るる川と
號し流るるありきおしは川流るるして流るるを死すありし
聖人川岸より在りたる童子一人忽然と散りて來りし
中より我は川の濃踏と号して來りせんと其後川中又入聖因寺
聖人後又終るる流るる終るる淺地を歩行りありと号し
と向ふの岸より終るる其時彼童子と看終るる又空籠にして
見へ終りて聖人其の右ひとあり 若や後の中より其像の靈
影は終るるのりと濃踏と號し見終るる安座の阿彌陀の像
水中又入終るる流るる濃踏と号し在りしと号し終るる感涙を散
りて是より濃踏と号し稱し奉らるる

平林山
本誓寺

二十四卷第十





聖徳太子の真像 高祖聖人 ける像は渡河の太子と号く用基

足信河坊奥州本誓寺に瘞しつる所弘長二年十一月朔日

先任者乃中又聖徳太子者て曰くいふ足信都乃聖人此

畀の化縁乃畫て本去又降らせ給ふ方り我是と云はしくあふて

世ふたえに故又来て汝又告るる多くと悟せしむり聖徳太子

給き覚めて是像と拜し奉るは遍身又汗と流し連眼より御

涙と流させ給ふ是信感悲し急きと悟してつと深して聖人

御入寂ありせ給なり不思議の靈像とて瘞しつる所は渡河の

太子と稱し今又抄ひくは像の連眼又落涙の痕在しけり

○聖人御真像 御自畫之真像上人 曰御自畫の真像○奇号の象

聖人の十字九字石摺十字名号 聖上人の御自畫 以上八品の靈像高

祖より足信へ附屬なり○曰禊連夜の御象 聖如上 ○奉獻名号

蓮如上人御在世の時陰念の月け名号を書し仰せ給ふ今日と奉獻之とて祝言と云
し致連よりと詠くかきたり我もけ名号と号して於陀乃本願と致言と云
け名号を書せ ○法苑上人の御象 聖如上人 奉獻名号 蓮如上

人の御象 聖如上人 御自畫

狐後より入る信州河内法乃順祥の巡遊一うり此或は若光寺小原川

を流る芝村の阿弥陀堂と拜し又渡川を越へ松代乃松平乃松平

松平福右衛門を過り會田の久やうり園田と經る松平の城にあり

再び狐後のより田へりりもあり此又園田の巡遊ありは本願寺なり

松平の松平下すり和田寺と號して芦田平月陸名田尚幼くて

渡河嶽乃林蔭香掛燈并は信州上野の園田之其乃の象

の別記と

狐後より小原を流れて園田の若光寺より原川を流り丹波橋

入る渡川を越へ松代戸倉林上田田中と幼くけりよその山

の名不あり即小原郡ありては亦よきとて人名本乃の遠きより

とて新衣を集り松上足則の号

その原やふせやふせ入るるをたふとて奉獻名号

伏屋より入るるうらやハ小満乃山境より田中の宿をり右名の川
川白く布引山あり浅間山の麓よりては嶺ハ信州上州の境より
越中又後入嶺の峯にたえに其煙ハ駿河の富士より遠き
うらやへよりもさひ人ハ後勢物渡り

信濃より渡り嶺が嶽より山々を近人の足やいざめ

天明二年のころけ山り終頂より火輪やとせしり出と嶺と敷く石
と飛く煙の湯のごく涌出林麻の人民死するの歳人といふ
あつ上野武苑甲斐の國より其時冷炎焼く砂地は榎
の或ハ一二尺或ハ二三尺滋又希代の政より富士の根
燃ききく土砂の吹出くつぢびきく不二の形少し換てツの
痛のくさふの形とぬくを室永くつりころんくるふのぬ
ぬくく煙のくさくさのぼりぞ只くぬふの形勢よこそけ嶺の川と濁川
くつ川の流さるるに流りて流るは是うん嶺間のふれ地獄の道より流さるると
土俗のいけ人又愛とくく東海北陸両方の道ありまより昔柳煙火は常味味
あつといふは然時三社の権現を後をさしませ

芝阿弥陀

松代よりハ里芝村より

阿弥陀堂

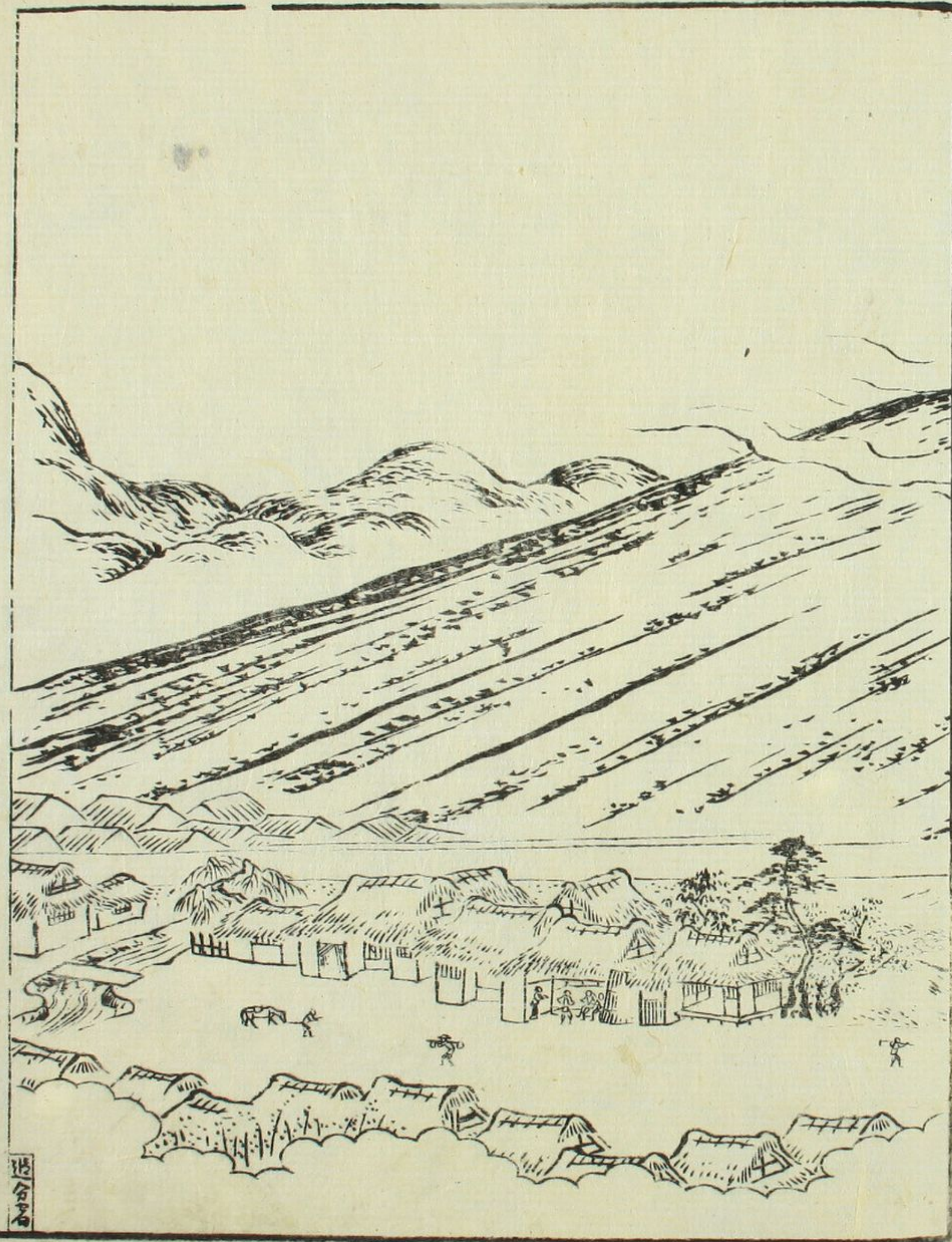
六間
十二間

心中面なる十字名号

親書上
御書

阿弥陀堂社造り

け石の氏津と出ありむ社人と吉池教馬といふ十字名号ハ御厨子且安
徳しなり曾て啓祥の徳は日月三度の極目より近村の男女群
集し或ハ一七日断食して諸病と祈る小其徳ありはくふりく其
ありり滋又如來の若巧異の方便ありて○本なる十字名号ハ姓若親
尊聖人鎌倉浄化寺の尉吉池某といふ武運長久のなること
授け給ふと祝ひなりりり小聖人足派と論せは此名号と書く
と人徳いりり教代の後永福の氏と吉池家名相續してけ名号と
表せり猶り小武士 此名号の奇特ありをけて流く不
以表に即先祖お徳り什室ことり武運長久の存するも
我一命に代りてとくあるりしは彼文孫懇願「理不盡
奪ん」にたるりり表に即名号と表して下総國祓勝教寺（近
入る小被侍流より進ひ来り）に不承し止りりり是派く勝



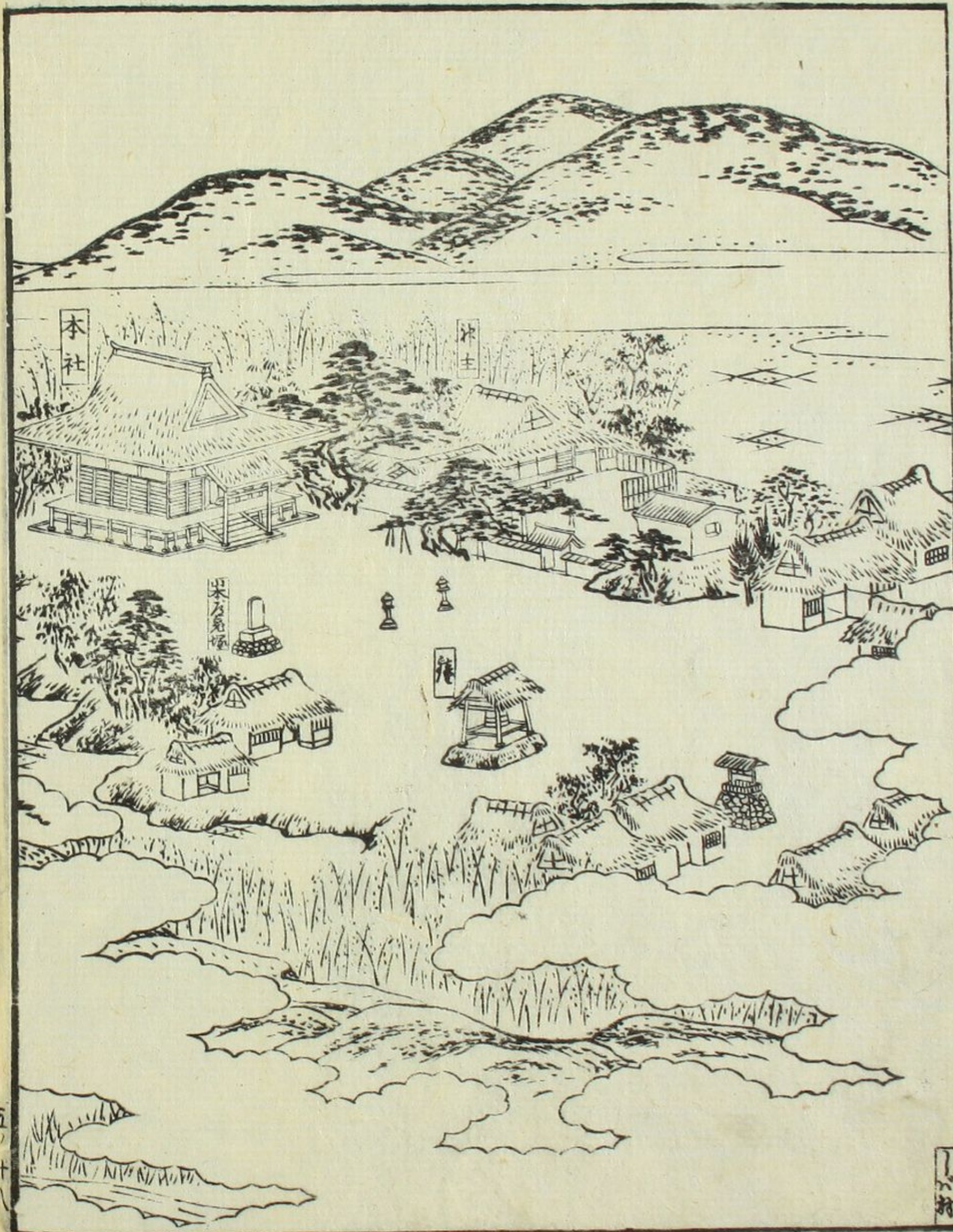
湯谷



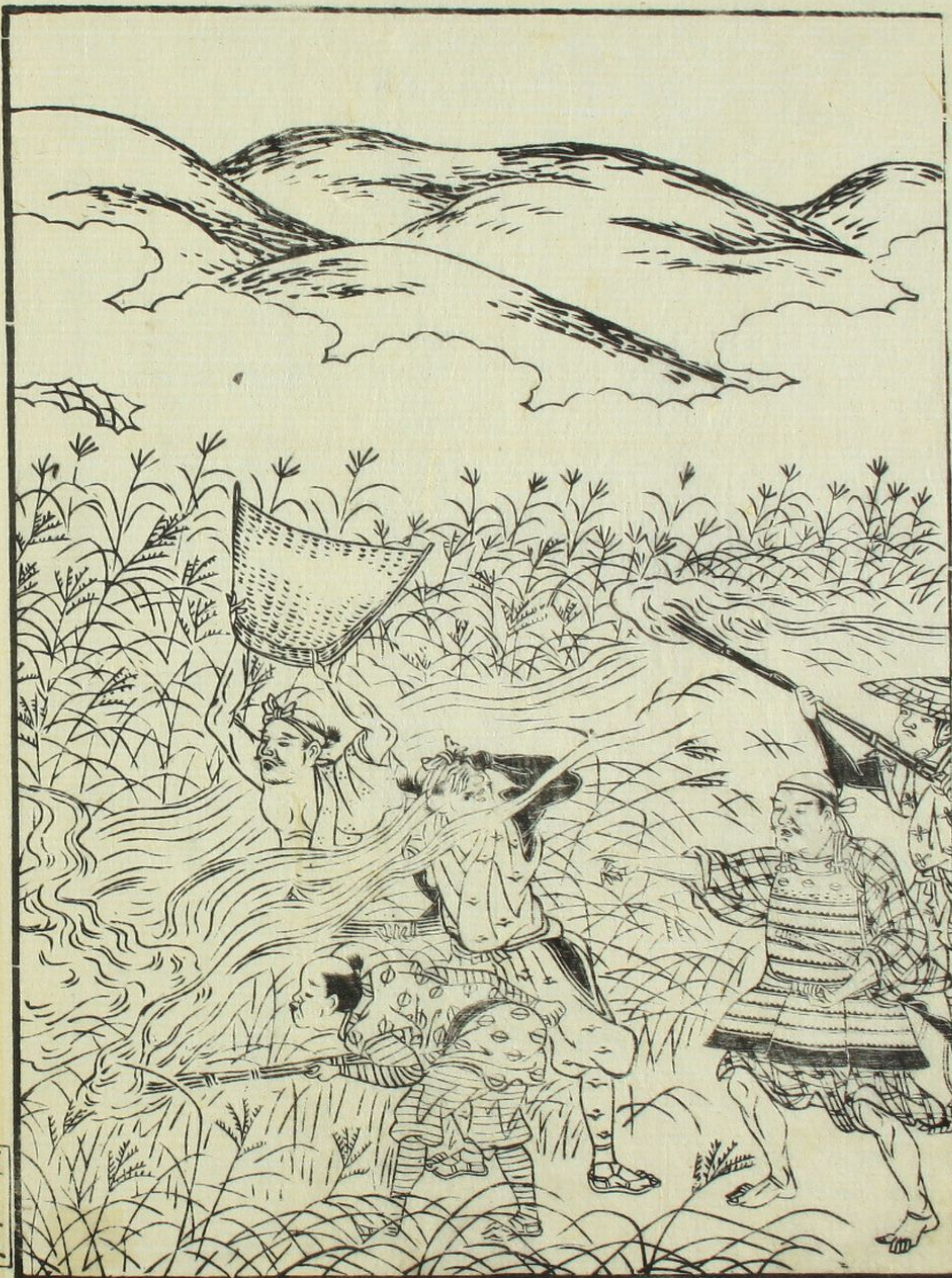
浅間が
山獄

五ノ

芝
阿弥陀堂



名号
奇特
天を
兔を
圖



追分の茶屋



親者と出く信濃國へ去りたるふけ侍頼心海へ頼追ひ奉りて夫は即今
 身を強さんよと云き方りゆく此茶屋の茶室に居る裡の中へ居るに右ふ
 侍男は侍若やけ此茶室の中へ入るとやせんとも被茶屋の口方と云と云
 て焼立るふ折は風烈く火端地は焚く黒煙を被ひに日廣きと云
 と物附の中は焼立今火起りとも火の中と道出んやよと云と云
 久遠き眼と睡しと云と飲むるぬえうふ老に即か寝る居る通り乃
 には間むくりの跡にさう今火を焼たんとせし寝るふ不思議や俄に
 村雨の一志きり降来て猛火悉く消しつ成るに即幸き命と助くじ
 まじと云云名号の御利益ありと云といよく信仰肝又徹し今眼下乃
 急難を天救ひ給ふりましてや後の世三悪乃の業火と消滅し女若
 又迎へ去給り何の疑ひもなきと案外外へは即けられ茶屋は結
 び刺松し法名と妙西と号し静寂として念佛して居るうらうら千村永隆に

年の夕とくや夏入る信玄大軍と引て出陣し東の方と争ひ日れば
の中より十八万の光明なるびきり久し信玄懐疑を以て彼光明なる
を尋見給ふは西の巻の角より出づる光明なる角を伺ひしは西
に独りて名を稱念佛してありし時掛たる名号より彼光明耀
信玄奇異の事い道なるを以て之の換と尋見給ふは西の巻
月内しりし物語即ける名号は武運長久の守りし親皇聖人の御
と委しくかきり中なる小信玄結執ひしは我今戰場又向ふ武運長
久の瑞又遠く今日の合戦は勝利と得る事疑ひはしと名号を以て合
新指し是は軍陣に録して保て其日ハ十の勝利と出づは名号は
加波力なりとく其附の陣を以て堂と建立し新西は移り是は阿弥
泥の未也也其外阿弥泥の畫像某師如來の畫像有持の銘は阿弥泥
某師降意之地と記す

室永の元享條の記に云く縁記下總國磯部勝教寺の佛堂
又城後國多田寺改國勝教寺よりい阿弥泥と云記す

白鳥山康樂寺

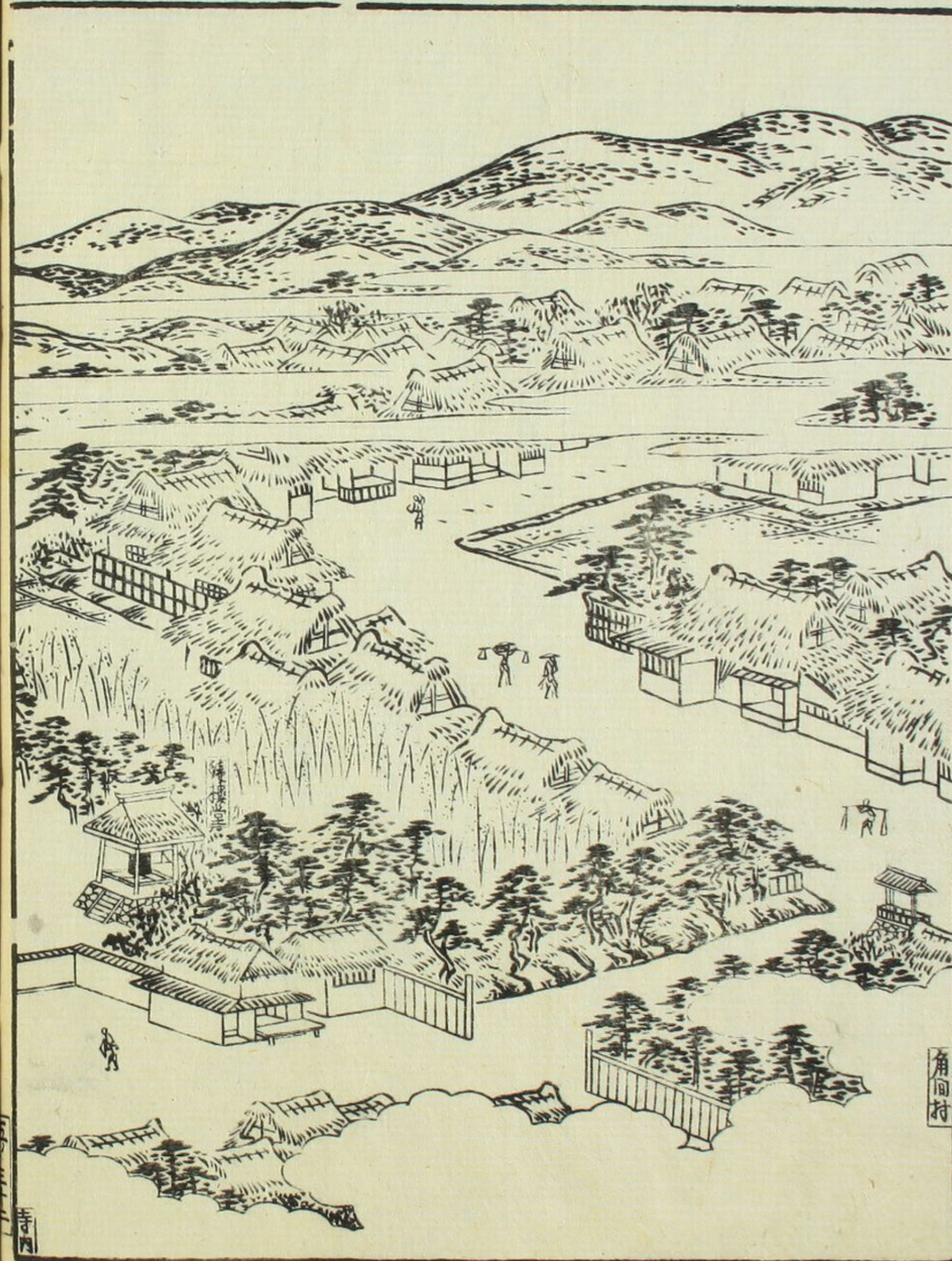
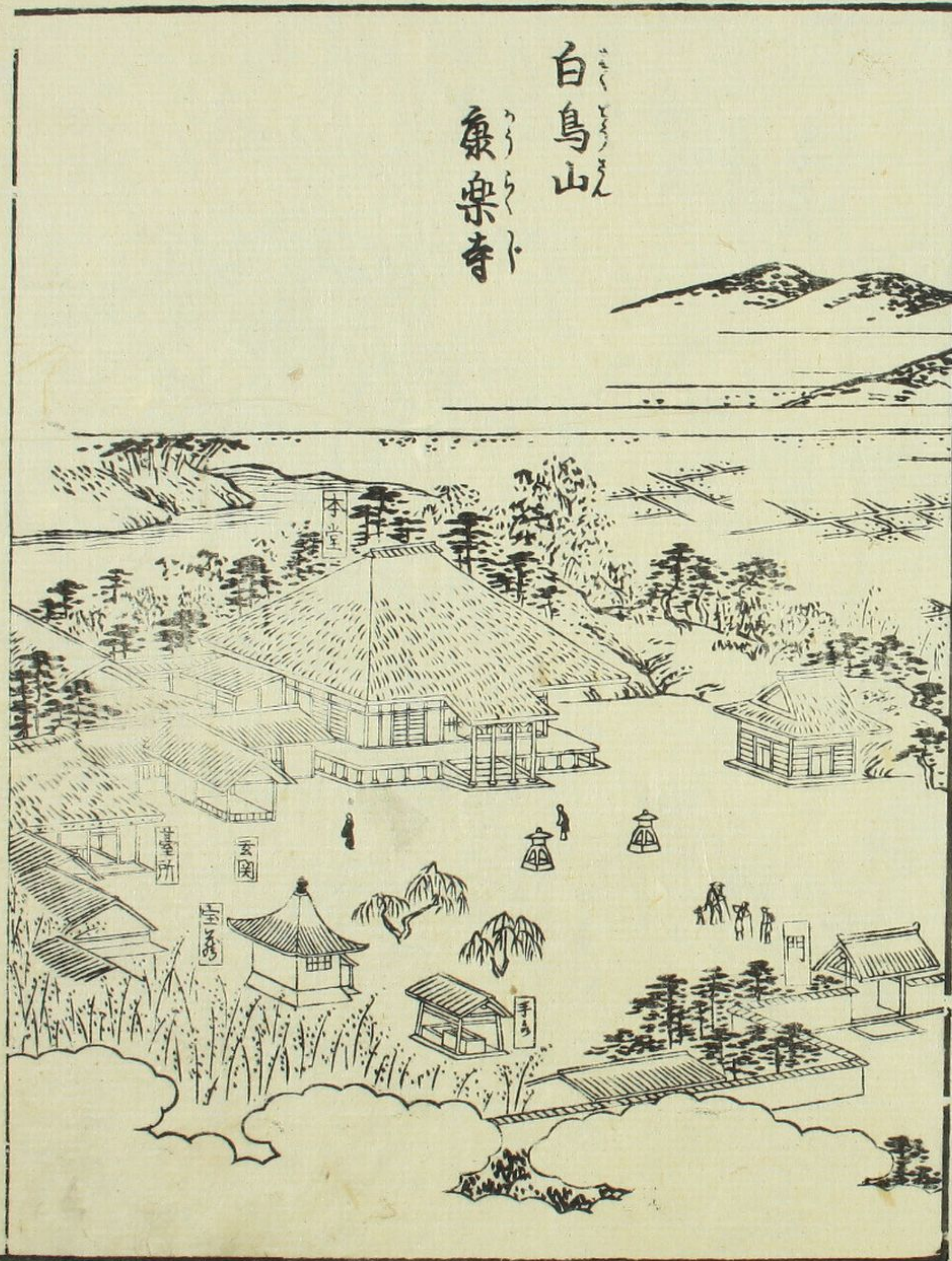
西流院家

柴村より二里半程あり

報恩院と号し奉堂十三間口面なる阿弥泥如來坊舎二區〇用
基西佛法師法持と人の名分なりは深依より西佛法師の信姓を信和
三皇弟曰の皇子滋野親王より九代の後胤海野小左郎源幸
親信俊守の子なり始りて禁廷に仕して勅學院乃文章博士
進士花人通廣と号せしが出家し西乘坊信教と号し南都真
福寺の学侶より後又叡岳と登山し慈徳和尚の門下より連淨
寛と改号せり本寺義仲の内内は博學の度ありは族書の圓へも頼朝御堂
と云く義仲の親書を以て八幡宮へ納めたりはまた坊光明といふ
け時高祖聖人の範宴少納言の公と号していまも所知推
かりとくも徳明博識とて一圓子語の若芝蘭の白い山
と兼て是より和尙の露毫衆と稱九人なりと云記す

未詳

白鳥山
康樂寺





淨寛
 聖人の
 佛性を
 観て後
 と死す

ひ終ら淨寛とけ若乃改して佛菩薩の化現して後うせた
まふと少く敬ひるるふけはるる靈愛とあ度まふ
感多る一うびの軌宴云佛身又現し終らと看る今一うびも
親自在菩薩現し終らと拜礼し忽軌宴の云と化し終ら
と凡そ愛の愛ぬ是又よの淨寛若重せうの目素又場と
聖人高祖聖人二十九歳はして法統と人の禪室又より念佛の真門
又入終ら一財淨寛も潜又修ひ終ら室師乃會より連て
淨弟子とあり室師より法名を西佛と賜り終らと西
佛の本より高祖又後依し信仰深固の友又よの若水の
門より修せ終らるれば法統と人是と知し終ら西佛とて
聖人と是の弟子とに終らるる西佛坊の聖人より高祖聖人誠
後へ九遷の時も供奉し終ら山陰国末路乃終仕り聖人

淨治乃とせ終ら初文曆の始の年西佛と仰らるる曰く休年終とてよ
まじとんととも山陰国末路廻の向路乃して我化意と賜け
うろろ識又満是せり自今ハ汝本國又歸り專修念佛と
弘通乃るべし正又我と若路みんより百倍の奉るる
いと愛へとせ終ら西佛聖人又別をなるとのめと割がてく
懇くいとひ修るとも師命乃重きと背き難く謹んで兼
しなり本國信州へりる始ら遍地を白く一字と開き
壯人又真宗と弘め後又隆徳又一寺と建立し是を唐樂
寺と稱し西佛八十八歳仁治二年五月廿八日入寂
とと云云 ○靈室物九字名号 大師修りて聖人の所まき ○十字六字名号 所
年服云 ○石橋名号 同浄孝委員二年とあり ○三都經 浄日 ○大般若の切 五多坊
の字是即 ○愚禿の御 聖人三十七歳所自畫有後 ○法統と人の



御像 是の御上人の御像と大尊の御像なり 御子達御身骨の所と云はれしを
御像 はる合せ秘造し 御子達御身骨の所と云はれしを
御像 はる合せ秘造し 御子達御身骨の所と云はれしを

御傳繪日記卷 御傳繪日記卷 御傳繪日記卷

西佛法師の像 西佛法師の像 西佛法師の像

御真骨 ○大經御延書 御真骨 御真骨

身代名号 身代名号 身代名号

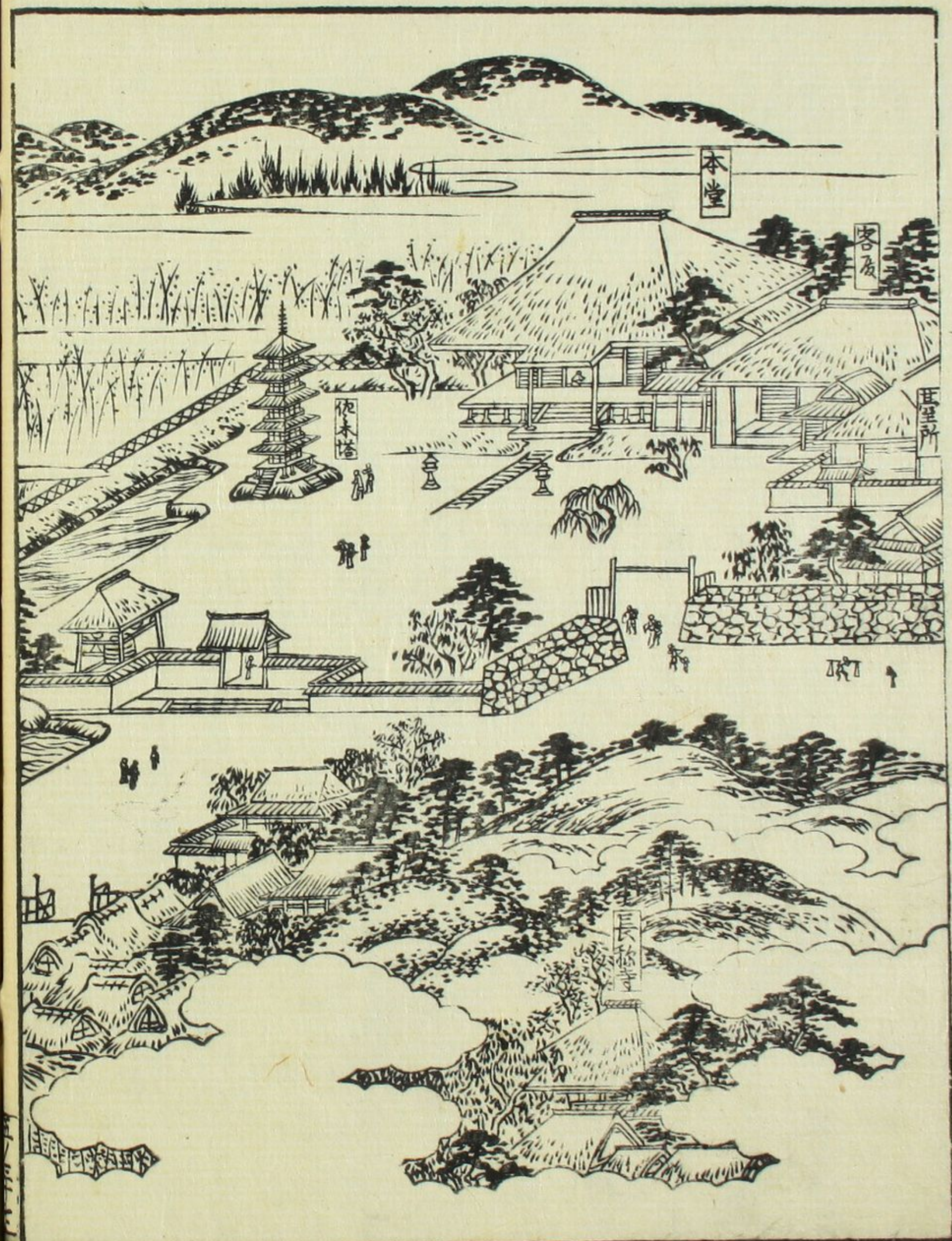
御子 御子 御子

其後の御子の御子と云はる 其後の御子の御子と云はる

高祖聖人直弟子了智法師の御基也了智法師と云はれし其
信姓多々天皇の後胤近江源氏佐々木に即高綱と云はれし
武士之源於朝倭皇國より義兵を揚げ躡るる平氏と討んと
く相州石橋山大合戦に敗れし後より後七條に討たれり云肥
乃秋山を遊のびらるる小平家の勇臣大庭三郎大軍と進進と
よりけ御朝既より危うなる小此佐々木高綱一人群る敵の
中より立てりし其來り大軍と進まより七度まで血戦し
終に朝朝を救ひ得たりされけ度乃勲功授群る朝朝威
譽のなまり高綱と近く拓き給ひ我若天運より叶ひ平家と
に天下の御權を握る者なりが日本中興を劃て休まんと

大宝山正妙寺 大宝山正妙寺 大宝山正妙寺

大宝山
正妙寺





より保して朝の威勢日々朝日のごとくとも繁榮の
平家の一族悉く西海の波より漂流せし終るまで及び一門
残るごとくも巨兵の後中又葬り朝天下と併言(征夷
大將軍の重職を賜り)割(國)は無(退)補(後)と云く政(刑)憲
く朝(朝)が(子)衰(衰)ありとしか(佐)本(高)綱(子)は(約)束(の)ごとく(日)本
中國と賜るべきふた(り)して修(中)國(七)州(の)司(と)して(是)を
くる(安)又(抄)ひく(る)綱(其)誓(約)の(遠)ひ(く)る(弘)隆(の)心(且)信
世(の)乃(と)ま(を)親(見)る(小)鳴(呼)渡(世)の(只)持(養)の(智)ひ(よ)て
今日(と)く(ふ)の(好)ま(日)の(變)易(以)我(と)して(我)事(と)定(む)ぶ(小)の(り
易(き)又(況)や(地)人(の)訓(小)抄(ひ)く(を)や(今)款(樂)の(床)又(抄)後
河(鼻)の(大)城(又)向(の)假(令)天(下)と(一)統(と)も(唯)後(の)戲(と)お
り(ハ)豈(人)を(して)眼(む)ぐ(ん)や(又)款(り)者(と)令(り)て(三)毒(の)酒(は)碎

外(ん)より(善)提(の)る(ふ)入(く)佛(果)公(勝)ん(ふ)は(志)ら(じ)と(て)忽
ち(高)野(山)令(剛)峯(寺)又(養)り(出家)して(弘)法(を)作(と)信(と)ま(言
察(法)を(修)修(せ)り(猶)且(も)難(修)の(る)遠(又)遠(く)して(好)む(る
り(不)徒(妄)念(の)圍(小)迷(を)昏(く)り(る)綱(入)る(難)解(の)修
難(き)ゆ(を)懸(む)の(石)又(名)塚(の)若)同(安)又(折)く(よ)や(聖)人(衆
後(國)又(遷)瀟(へ)地(方)易(修)の(法)と(弘)教(し)終(ふ)を(修)修(人)急(ぎ
持(山)の(霞)雲(を)お(け)万(里)の(海)川(を)紙(へ)く(紙)の(後)州(よ)下(向
して(國)府(の)芝(原)小(系)し(聖)人(又)消(し)ま(る)祖(聖)人(の)綱(の
出家)して(の)波(と)看(修)ひ(そ)修(又)河(海)を(浮)れ(終)ふ(高)綱(も
修(又)派(と)神(小)派(と)な(が)る(終)心(の)因(縁)日(次)の(志)教(と)の(べ)何(ま
と(河)教(身)み(久)き(り)と(終)入(聖)人(高)綱(が)記(實)と(藏)下(を)修(終)又
修(日)く(汝)望(く)も(教)記(心)の(志)と(終)り(は)是(名)塚(の)あ(る)あ(ん

されが一切ある時愛の界の愛のてく又幻のてし猶り小庵下
為地の元ま造悪不善の族若根切徳の種まう候妙學者の
功も積まれども速に佛果よむの直るに餘隙中弘の折云釈
よむるものばしけ折云釈と海く信心せりものたると三世諸佛
の海度よまよとつる又逆の衆人十方淨刹の門戸を閉ざし
垢穢の女人も直に妄言の淨刹よむりて無上覺と覺とる
りも淨刹の疑いみえうびを今一念救起の淨信よむつと
稱名念佛の正業と勅しどしとと稱んごら又淨教化はし
終ふまよ抄いて高細立ふに地方易妙の旨教と受得し後
生安定の了解と露り着た真の御弟子とあり法名を
釋了智と賜りりるまよ抄いとまづく淨教化の益と義
不疑のふよんて信州よま誠栗林の郷よ一寺と記し心妙

寺と号け専ら稱名念佛をうらなうりき 栗林といふ松本
より二里西南あり 然も
松本の筑前石川玄蕃彦善提不るふよりて天和年中松
本に移住○竹室高祖御真宗十字名号○いふ名号 蓮
上人
○にる連座真教 高祖聖人法名西佛了智也後漢もあまし御志
少て実如上人御書あり法名誠栗林國語云云
寺の御基即住本三郎慶綱之西佛の康樂寺の御基海邊小寺即奉親の息進士
死入通度後支坊光明く人先了智の遺言の御基住本三郎高祖也入務直宗
寺の御基の慶綱より其玄孫三郎先賢とく入矣住は是とも今い真教も存人とい
慶綱入る法名と書加孫よりい法名坊の慶綱のり遠ひは是高祖と兄弟あり小後
てまよ連座令り
○系圖の巻物 る綱の
○武田信玄と諸叔虎澤本印
矣況は曰住本に即高細教祖との始遠遠のゆと終り既
津教と企んとせし時西佛坊まははこれとてる綱へ送る一書とて曰
かくのまよく書して送るるふも綱もま着てまよはは二の意は悟り得て
津教をまよまりて終心せりるん其まよりや否やとまよいらふまよ

大宝山心妙寺 西流御坊所 日圓はあま
御基の住本に即高細入道了智也系圖本流心妙寺と

日系國けいこくなりける網用基の寺二つよふとよりしるも何ぞ根柢こんていをかたむけ

本曾山長稱寺 東海 日國下にっこくか

用基もちもとの義延坊念信ぎえんぼうねんしん 信姓本曾 念即義基 覚如蓮如乃西上人妙化の靈しん

場也中古誠後國より安又移住うつりすまいと云云○義延坊念信

高祖聖人の真弟也とも云又真佛上人の門弟ありて

祖師の孫弟子なりと云しつひ傳へ何と云是なりと云を

志すは

宮川神社八幡宮の社

松平一ノ三屋中 中条村より

社説しゃせつ曰祖師聖人の真弟諏訪郡丹後守源奉政

法名宮川津喜坊姓所なりとぞ○什宝九字十字の

名号○三方心面如來○聖人に十歳御本像○後先六

字名号○津去和漢○日乃丸名号

右の聖人より附屬 津去教如上人 孫如上人 所産書ありと云云

○英徳國より信濃に入東國より入本名街乃と云なり先英徳の海

合より馬込よあるけりる石橋あり英徳信濃の境なり坂馬込

と云は是よりあるなり本名街乃と云云英徳山三戸村中條村と云

かろ山坂多し

出づり入らるれば津のらうと云は本名街乃の親と云らる

須原あけ松のらふ小舟村の是は本名義仲の家也今舟田即通を

右郷と云は松の上通橋の下に本名川津岳川合流のふりてある本

名の橋道にひるの筋敷より云

○上流方より下流方へなる津社一徳四ノ記を引て曰天孫降臨

すは津津の川照姫と云なる津社一徳四ノ記を引て曰天孫降臨

しつとつり建御名命 御業よ通入て明り経津主の津波津

をて是と通し建御名命通て信州後方より門へ降る修へく

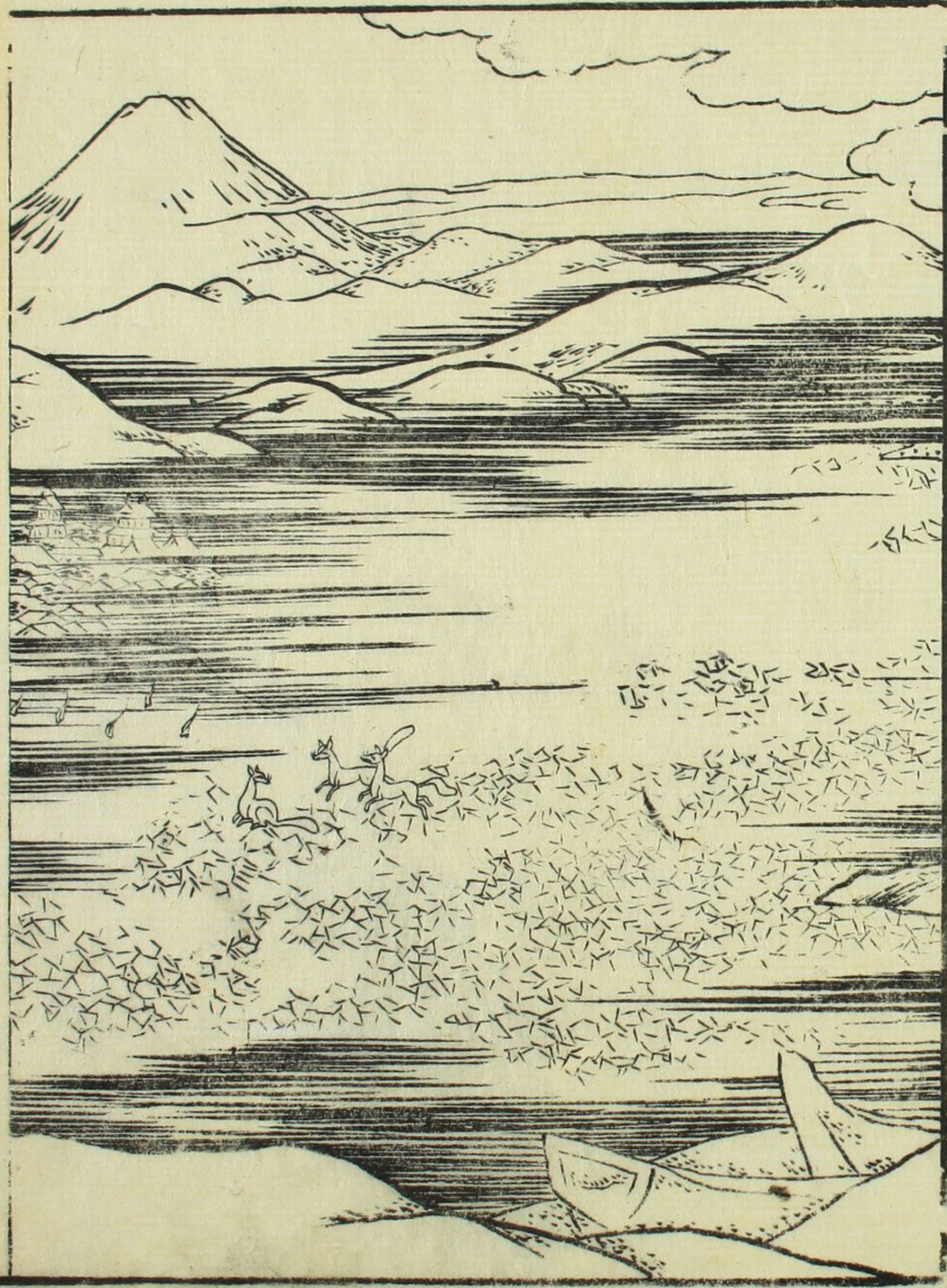
やとくは後方の郡と云て我は場なりと云て天孫の命は降るは

床の覚寢



1723-24





諏訪湖

この井田孫又若く則免し終ては法防明神是と云ふ
○法防の湖邊ひうれ各湖うて西の飛弾と此の炭うへび三木の法防
うら不二の三根と遠くを湖の帆五三里とほらへとも丸山三木の月
よみく風と系勝又まの魚にたぐうは珠よまの種とわの月湖工
一面を水たう法うら人馬皆水のこと性来し法防の工と性来は
るの近きと教里去人うへ傾利とてり霜月の始より湖に水と性
其の中法防よりとらみあうは法防の在りて後の人皆夢うてのた
馬と馳來と畏るは湖よみくれともふへりゆふまのさくさく水破三
人馬湖あまふ入りとも人例と性来は法防の湖津春属の性来う
命してとめて法防と教へたまふとも一二月の末再び法防
水と法防は又明神の人馬の性来ととも法防よりとも湖工と性来
若くは法防川百首取神なり

法防の湖の水のこのうひ法防の津よりまうて解るる
人取所が袖中抄うは信濃の法防の明神の一人とて女神の津(附
妻の海向の疾風ひ法防人抄ひとも法防の湖水うて解るる
法防の津の海向の疾風より法防の津のこの水の上よりまうて
具は解ぬとも入りとも一説は水のこの上より法防の津より
まうしとも里人も先より法防の神なり

上野國

信州松井沢より法防の湖へてと建國坂なりとあるまより法防川
又松井沢より松井田の南あり所傳より東の方十七丁と赤本山あり
其の標記に小倉山智明坊の四條あり

小倉山智明房舊跡

信州松井沢よりと建國坂なりと松井田二十七里余
松井田より十七丁西より小倉山あり

智明房の法防上人の所弟子とて智明蓋徳乃知識あり

小倉又隠遁と云ふに十年 元久二年の
室治二年と 居候し終つて人なり

高祖聖人滅後又二年乃同濟慶はし建曆元年勅免

と性防り終つて其の性防の言上治の思ふはとも人とも小國

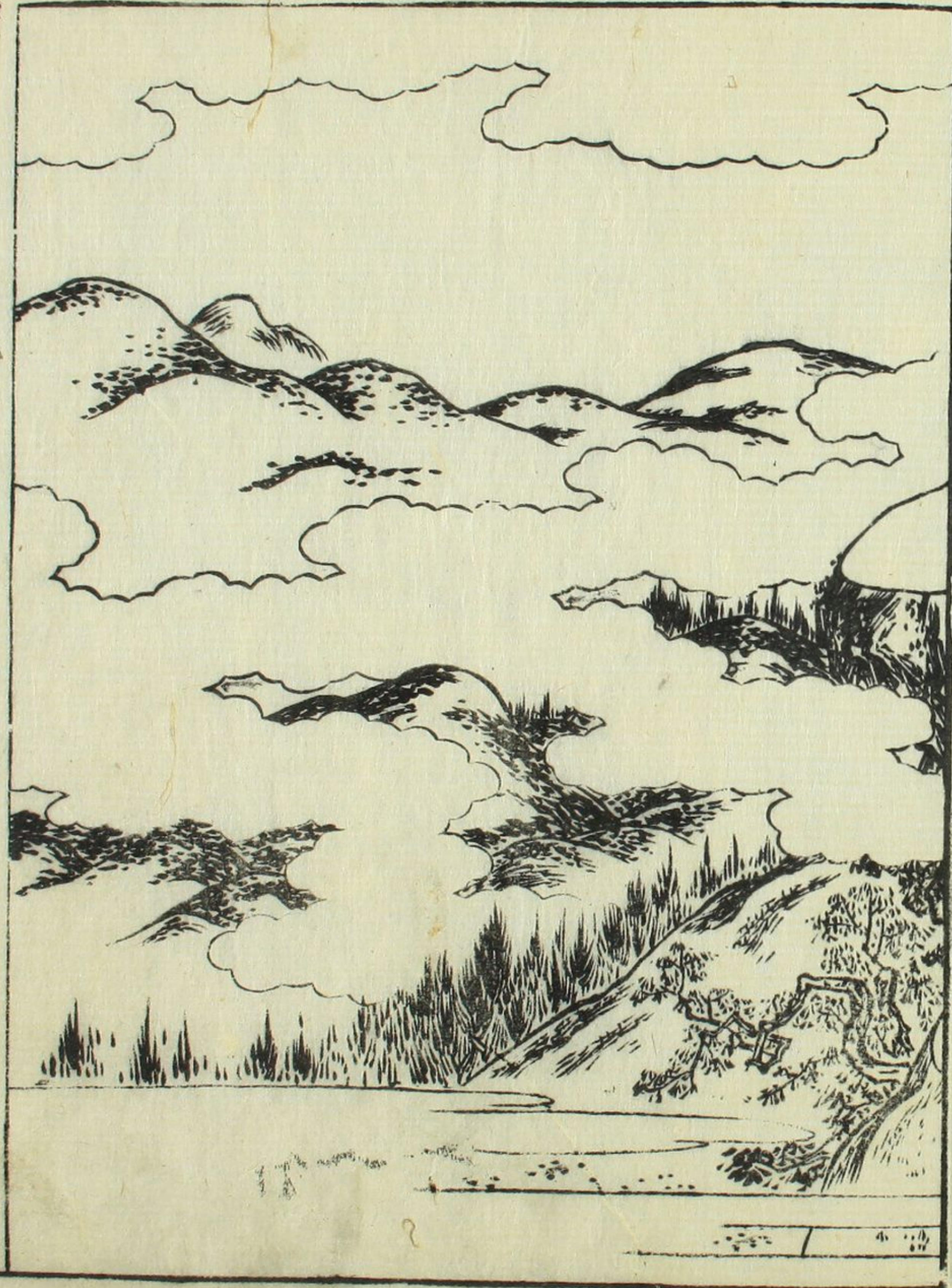
と雪海く山陰道の性来は雅く東海より上治く

終つて信濃治はしかり若光寺へ向参詣ありと性

吹峰と紙へ松井田より終つて小倉山より人とも智明坊

在りともと性防は其の性防ありて京師の性防

圓より小法防上人の正月二十又日所遷化ありと性防



一石は聖人たるべき時候に流ひて我と悟と急ぐる
悔ふ大師上人の悟しなるとんぬれたるふた所をまうり流ふ
まの正法と急ぎ何りせん今んたの心せよとて急ぐる愛もたつて
御深苗もよく信州と州の間と化儀し流ひたるなり

○松井田より西の方字里身は妙義山あり山を取らば聖山とて唐土の天竺山と
し和名くは峯堂岩壁奇状万変なり結なり名はくは龍虎の巻ひとれるも
或人の座をとりて或は菩薩の坐をとりて中興とて名をいせまのるを
いふ中興の後の方と稱ひたるなりこの山は如來の本迎候の姿とて
其頂は村々の衆もく大なる窟ありこの方と岩巖接たりて石階の候
なり今も空を高くしけりやまをくしと疑りも是なりなり百合若
て行ぬきより窟とて人々の休けり其より其の流へり二里の積る三ツの丁門あり
其二ツの門のより三ツ金太横たうる九十七八間ありて巖の幅は二三間ありて
二方の板を平らむとて雁門の巖と十三間西岩の削りまうとて
これと候まればはまをくしと疑ひもたはまの天竺の奇峯巖中のま山と一
なるなり

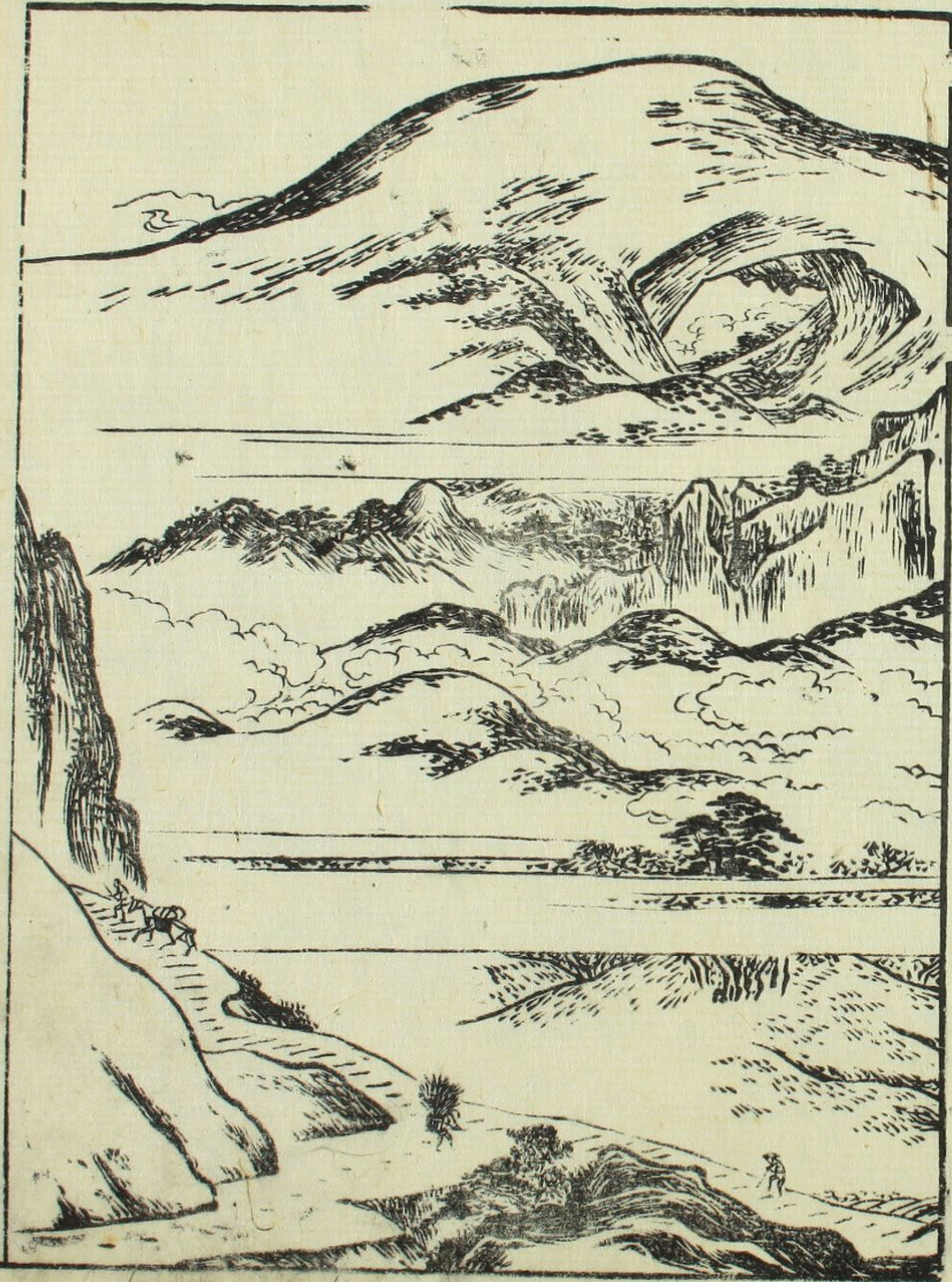
○妙義山より群馬縣敷波へは約三丁余けぬる名物の候なり我人の犯す

いしりとも愛しむる暇あり名のなりなりとあるなり

一谷山妙安寺

系流院家 赤木山より中へ三里安中よりなる
本山支助 三里尾より又三里麻塔より

高祖聖人親戚の沖弟子二十四輩身六二公誠徳沖坊の遺跡なり本
阿弥院佛心慈僧都乃沖也高祖聖人信縁のる像也感徳坊僧徒ハ
九條家のま屬中村中ねり系流とて人々の後裔のお小輩とて下
國後徳郡一谷といふ一配流とて流し入け時高祖聖人常陸國福
田に在り沖化儀ありて流し入りて急ぎ福田へ系流し聖人西
云流し入り聖人沖親屬乃沖也縁とてひ安美の衆に配流せし
まふをいふとて思ふは殊といふ月とて流し入るなり聖人の
へ系とて沖教化とせり流し入りて沖親化力乃妙法に如來出世の
中懐凡まま入りの要格なるなりを得得く信心獲得し保て聖人
真乃沖弟子と知り判發深衣の次とて名を感徳坊とて流し入





兼久三 是より降育して中教を信じたるの専ら海く又二心なき
つるべき成徳坊一谷と一字を造るしうとも聖人の命り
より日國三村の堂よりと移し利号と妙安寺と号け終る
聖人所降治の後も成徳坊安又信じてまゝく成徳坊
法相續あるが弘長の秘の以成徳坊年終長とせたま
ひぬまが成徳坊より降らせ終るなりやと東國の門系を
中合てと治して今一度聖容とも拜せまんと換へ儀し
はとも老る叟老る叟の存るるる都と世くらん
るも叶ひがごとく即成徳坊に付て教ひたるに我くいるに
は云の若極少や聖人の所化蓋と終り成徳坊の教と連
ちりぬれがなりと聖人所自所真像と所記念より下場
とゆりり生記後の教ひ成徳坊後までの所化蓋具と衆

世の所對面とも仰まらばととく海とるに教ひたりと
成徳坊殊勝と云い成徳坊門系無代として弘長二年上治
みく良久く終るる聖人え拜教り上らばく聖人何
りよりと関東の門系もく成徳坊を信じ念佛乃
信心あるればをすせるとも成徳坊又成徳坊終る
平所成徳坊よりと関東の所信者所真像を教ひたるは
と言とヤされたりと聖人所慈哀の余り所降容ありて所
老待の若惱とも所厭ひく自刃刀を下しと所真像
を彫刻し終る是より心根を養ふる形るれば東世に
とけ形像をそ化蓋せしむべきものとも成徳坊又授はるる
成徳坊教徳所後し是と頂戴し成徳坊中下總より二村
の自坊と安徳し門系の輩と拜せし終るれば成徳坊



の道俗疑ひ集りて沖真親と拜し歎法陝仰と云々
 沖在國の昔も勝り是より妙安寺にお傳し安んずる
 敵に打ちける と本元ともない安永八年の元大谷遠次権左衛門守尉又安永車
 保の二元ともいふ沖真像の聖人國東より沖安のりわす
 成持坊沖安坊と稱しを後人より沖安の沖安金と云々
 河自他も成持坊へ沖安屬しと云々後人沖真像と云々 其時國東の死守
 寺の寺銘を寄附せしと云々善提所と云々一終ふ去るふそのくら
 け郡守武州川城を領し彼をにうり終人か妙安寺も
 としと隨後して川城を移住せり 其とれ三村の四地もお續し
 寺号と成持寺と改め通事あり
 されとも貞享年中古来の寺号も後し妙安寺と稱し別寺と
 さまうまうんが三村まをりの両妙安寺とも日地日系り寺なり 高祖
 聖人河自他の沖真像を川城移住の妙安寺に安んずる
 ありしよとまぐみ難き子細のりりてけ真像と云々本願
 寺も後したてまつり今亦の沖本廟と云々めする沖像を
 とるいら是なり其後再び上野厩橋へ寺と引うつはさきと

然るに後傳つるふと云々のいなるもりなりと云々記と云々安永
 の記享保の記大谷遠次権左衛門守尉の記と云々の
 靈宝品目 ○高祖聖人等身御親 蓮如上人の御等々教如上人
 免侍あり安永と
 人御派状あり ○泥等十字名号 ○八字九字十字六字名号
其の
 小
 成持法師
 流の聖人御等 ○宝右子御款 ○唯信抄 河上聖人
 沖真像 ○成持法師自畫像
 右宝物等乃表具表紙文庫管等悉皆せよた
 ぐいなき重宝るれ世と門系乃成喜他も認せし
 ことと 比類なき寺格なりとぞ

○厩橋の地天正年中織田信長乃家臣勝川元道が監二番居置
 と野と武系との界とわんの川と云々の川あり勝川一益相州小田原の
 成持法師政と對戦し不之又下野の界と後世川あり川の
 大田本本のると新田と云々の義貞居置の法と新田の金と云々の
 石に馬場乃法と云々の河の向ふ下野の地と成持の石と云々の
 成持乃石出の地と云々の河の成持と云々の地名と云々の

二十四輩順拜圖會卷三五終

○五柱名和司馬乃わたりよとある山あり此山中いふか乃沼あり
 いづかのやいづかの沼のいづつてはしき人と今いふと
 入山とたいうかの湯ありらうと山も此よりう
 うも玉の玉髪らぬけとて本の下流に瀦れぬとある
 ○刀根川又此遠より乃大川なり勅勅撰
 筆をけり神こそ母とて川の石踏むといふ
 ○赤城明神の社に勝田郡あり本地主漢大菩薩元恭天皇の御代と
 上野のともこのはつきのやまといふと

浪華春泉齋竹原清秀畫



跋

書肆某等。齋二十四輩巡拜圖
 會者而到。傍請其是正也。予乃
 謝曰。吾固不知文辭。况於瞿曇
 氏之道乎。且性多病。及未嘗出
 都門之外。見所圖會之靈地
 傍境。亦未見之也。以其一所不

去與所不見。而憶斷之。猶瞽者
論文章。聾者辨鐘鼓。吾之教。
吾豈敢。固辭再三。某嘗請而不
已。乃繕其書而閱之。只行文燦爛。
摸圖優哉。謂之二絕。豈阿其所好
乎。而綴緝緣起。故度者。河四之
了。貞師也。姑舍而不論焉。若夫

摸圖其靈地。務墟者。我竹原生
子。生往年提挈三友。而遊北越
東關。見人之所未見。聞人之所未聞。
而煥發其蘊。奠者。結搆之思。寧
亦周矣。於是乎。摸圖一切奪化
工。可以知而耳。縱令彼靈地勝
境。之非。而夜哭。亦何怪焉。以

某等懇求之知。而不得。乃遂以
 斯云于卷尾。以塞其責云。于時享
 和癸亥春三月

法橋玉山藏



僧了貞著竹原春泉齋画

二十四輩巡拜圖會後篇

全部五冊

此篇に載る所は江戸浅草乃御堂藥地御坊よりとどめ
 上野常陸陸奥出羽下野下総相摸甲斐駿河遠江参
 河尾張美濃摂津河内大和備後に至るまづの御舊跡
 を前編と同トく真景の繪圖を加へ里數名所等と集め
 記し其後の篇と合せ視るとこれに安坐し多御舊跡と順
 拜せしむの書なり

彫刀氏

京

大坂

井上治兵衛

樋口源兵衛

市田次郎兵衛

池田長右衛門

享和三年癸亥春新刻

京都書林 菱屋 孫兵衛

江戸書林 松本 平助

小刀屋 六兵衛

海部屋 勘兵衛

勝尾屋 六兵衛

河内屋 太助

大阪書林

